

松江市文化財調査報告書 第145集

(仮称)上乃木高齢者専用賃貸住宅新築工事予定地内発掘調査報告書

後廻遺跡

平成23(2011)年10月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第145集

(仮称)上乃木高齢者専用賃貸住宅新築工事予定地内発掘調査報告書

うしろ ざこ い せき
後廻遺跡

平成23(2011)年10月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、平成 23 年度に実施した、(仮称)上乃木高齢者専用賃貸住宅新築工事に伴う後廻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は野津氏から松江市教育委員会が委託を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在は以下の通りである。

(名 称) 後廻遺跡

(所在地) 島根県松江市上乃木三丁目 609 番 1、外 3 筆

4. 現地調査の期間

平成 23 年 4 月 18 日～6 月 20 日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積 980 m²

調査面積 650 m²

6. 調査組織

依頼者 野津康嗣

主体者 松江市教育委員会

平成 23 年度【発掘調査】

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島 律子
	〃	文化財課 課長	錦織 慶樹
	〃	〃 調査係 係長	赤澤 秀則
	〃	〃 〃 主 幹	昌子 寛光
	〃	〃 〃 専門企画員	曾田 健
調査指導	島根県教育庁	文化財課 文化財保護主任	松尾 充晶
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団	理事長	松浦 正敬
	〃	埋蔵文化財課 課長	藤原 博
	〃	〃 調査係 係長	中尾 秀信
	〃	〃 〃 専門企画員	後藤 哲男
	〃	〃 〃 調査員	落合 昭久 (担当者)
	〃	〃 〃 調査補助員	福光 龍治

7. 調査に携わった発掘作業員

細田 美晴、細田 美智子、加藤 恵治、上田 孝子、原 英誉、神田 猶敏、相見 節雄、
安達 福、木村 司、飯塚 倫弘、内田 義、細木 澄子、福田 進、松崎 明、金津 善雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下のものを行った。

福光 龍治、秦 愛子、飯野 正子、千代田 絵美、石川 香苗、金坂 昇、小原 明美

9. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

島根県立三瓶自然館サヒメル指導員 中村 唯史

島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター 東山 信治

10. 本書に掲載した現場写真、遺物写真は落合が撮影した。

11. 本書の執筆・編集は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、落合が行った。

12. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

(弥生土器) 松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』

(弥生土器・土器器) 鹿島町教育委員会 1992「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』

13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。

14. 本書における遺構記号は以下の通りである。

SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SP：柱穴 SA：柱穴列 SD：溝

15. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。



島根県・松江市位置図

本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯と関連調査	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘調査	2
第3節 工事立会調査	2
第2章 位置と環境	4
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要と基本層序	7
第2節 遺構と遺物	10
第4章 総括	43
第1節 遺構の変遷と様相	43
第2節 まとめ	47

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

	島根県・松江市位置図
第1図	調査位置図
第2図	試掘・工事立会調査図
第3図	後廻遺跡位置図
第4図	周辺の遺跡分布図
第5図	調査グリッド配置図
第6図	調査後 等高線図
第7図	後廻遺跡 遺構配置図
第8図	後廻遺跡 調査区土層図
第9図	S101 平面図・断面図
第10図	S101 出土遺物図
第11図	SB01・SK47 平面図・断面図
第12図	SB01 出土遺物図
第13図	SK47 出土遺物図
第14図	SB02 平面図
第15図	SB02 断面図
第16図	SB02 出土遺物図
第17図	SB03 平面図・断面図
第18図	SP256 出土遺物図
第19図	SB04 平面図・断面図
第20図	SB04 出土遺物図
第21図	柱穴・遺構外 出土遺物図
第22図	S102 平面図・断面図
第23図	S102 断面図
第24図	S102 貼り床面 遺物出土状況図、SK285 断面図
第25図	S102 貼り床除去後 平面図・断面図
第26図	SK250 平面図・断面図
第27図	S102 貼り床面 出土遺物図
第28図	S102内 SK285・SK270 出土遺物図
第29図	S102 埋土層 出土遺物図1
第30図	S102 埋土層 出土遺物図2
第31図	SK250 出土遺物図
第32図	S103 平面図・断面図
第33図	S103 出土遺物図
第34図	SB05・SP176 平面図
第35図	SB05・SP176 断面図
第36図	SB05 出土遺物図
第37図	SB06 平面図・断面図
第38図	SP88 出土遺物図
第39図	SB07 平面図・断面図
第40図	SB07 出土遺物図
第41図	SA01 平面図・断面図
第42図	SA01 出土遺物図
第43図	SD139・SP105 平面図・断面図
第44図	SP105 出土遺物図
第45図	SP72・SP108出土 焼粘土塊図
第46図	後廻遺跡 弥生時代中期末・後期初頭頃
第47図	後廻遺跡 弥生時代後期後半頃
第48図	後廻遺跡 古墳時代前期頃

表 目次

表1	島根県内で確認された布掘り掘立柱建物跡
表2	土器観察表
表3	石製品観察表
表4	焼粘土塊観察表

写真図版目次

- 図版 1 調査前全景 (東から)
調査区内堆積土 (北から)
調査区内堆積土 (北東から)
- 図版 2 S101 プラン検出 (北西から)
S101内 中央ビットSK294 土層断面 (南から)
S101 完掘 (北から)
- 図版 3 SB01 完掘 (東から)
SK47 完掘 (南から)
SB02 完掘 (南西から)
- 図版 4 SB02内 SP264・SD117 (南西から)
SB02内 SP264 土層断面 (南西から)
SB03 完掘 (東から)
- 図版 5 SB04 完掘 (北から)
SB04内 SP35 土層断面 (東から)
作業風景 (東から)
- 図版 6 S102 プラン検出 (北から)
S102 東西 土層断面 (南から)
S102 南北 土層断面 (東から)
- 図版 7 S102 床面 遺物出土状況 (南から)
S102 床面 南側 遺物出土状況 (南から)
S102 床面 南北側 遺物出土状況 (北西から)
- 図版 8 S102内 SK288・SK287 土層断面 (東から)
S102内 SK270 土層断面 (南から)
S102内 SP276 土層断面 (東から)
- 図版 9 S102内 SK285 遺物出土状況 (北東から)
S102内 SK285 土層断面 (西から)
S102内 SK285 完掘 (南から)
- 図版 10 S102内 SD293 (北から)
S102内 貼り床 断面 (南から)
S102内 壁際溝 2 完掘 (南から)
- 図版 11 S102 貼り床面 完掘 (南から)
S102 貼り床除去後 完掘 (南から)
- 図版 12 SK250 完掘 (東から)
S103 土層断面 (北西から)
S103 完掘 (北西から)
- 図版 13 SB05 完掘 (北東から)
SB06 完掘 (北から)
SB07 完掘 (東から)
- 図版 14 SB07内 SP02 土層断面 (東から)
SA01 完掘 (南東から)
SD139・SP105 完掘 (北東から)
- 図版 15 調査区南側 調査後 全景 (北東から)
調査区北側 調査後 全景 (東から)
- 図版 16 S101 出土遺物
SB01・SK47・SB02・SP256・SB04 出土遺物
SP60・SP97・遺構外 出土遺物
S102 貼り床面 出土遺物
- 図版 17 S102内 SK285・SK270 出土遺物
S102 埋土層 出土遺物
- 図版 18 S102 埋土層 出土遺物
SK250 出土遺物
S103 出土遺物
SB05・SP88・SB07・SA01 出土遺物
SP105 出土遺物
- 図版 19 SP72出土 焼粘土塊
SP108出土 焼粘土塊
後廻遺跡出土 焼粘土塊 (SP72・SP105・SP108・SP247)

第1章 調査に至る経緯と関連調査

第1節 調査に至る経緯

平成22年12月1日に松江市教育委員会文化財課（以下、当課とする）に松江市上乃木三丁目609番1、外3筆に（仮称）上乃木高齢者専用賃貸住宅の新築工事についての事前協議がなされた。

この計画地及びその周辺での遺跡の分布状況は「宇賀Ⅰ遺跡」・「宇賀Ⅱ遺跡」・「経塚古墳」などが知られているに過ぎず、計画地は未調査地であることから、何らかの調査が必要である旨を回答した。

平成22年12月8日付で依頼書が提出されたので、当課で平成22年12月16日に現地踏査した結果試掘調査が必要であると判断し、平成22年12月21日に計画地内にトレンチを4本設定して試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、全てのトレンチで直径20～50cmを測る大小の柱穴跡を多数検出したことから計画地全域に掘立柱建物を中心とする集落跡の存在が明らかとなり、後廻遺跡とした。しかし遺物は1片も出土せず、掘立柱建物跡の時期等の詳細は不明であった。

当課は事業者と数回の協議を重ねたが、遺跡の検出面が表土下約30cmしかなく計画変更等が困難であった。その後事業者から平成23年1月14日付で文化財保護法第96条に基づく届出が提出され、また3月18日付で文化財保護法第93条に基づく届出が、3月28日付で発掘調査依頼書が、各々提出された。

発掘調査依頼書では、当初の調査面積を開発面積の980㎡から建物が建設され遺跡に直接損傷を与える区域の650㎡に縮小されたものであった。これを受けて当課では全体計画を検討した結果、建物建設区域については全面発掘調査を、北側の階段新設工事区域と市道京塚宇賀池線に隣接する側溝敷設工事区域については工事立会をすることを事業者へ回答した。



第1図 調査位置図 (1:10000)

第1章 調査に至る経緯と関連調査

当課は全面発掘調査を財団法人松江市教育文化振興事業団に委託し、平成23年4月18日から同6月20日までの間で実施した。

また、北側の階段新設区域の工事立会調査を同7月15日に、市道隣接の側溝敷設の工事立会調査を同6月24日と同27日、9月8日と同9日の計4日間実施した。

第2節 試掘調査

開発計画地に3m×1.5mを基本とするトレンチを4本設定して調査をおこなった。計画地の北側中央には第1調査区を、西側中央には第2調査区を、北東隅部には第3調査区を、南端中央には第4調査区を、それぞれ設定した。掘削には重機を使用した。表土下18～50cmで地山を検出した。地山面には農業耕作機の痕跡が無数に付いており遺構の残存状況は不良と思われた。

しかし、第1調査区では径約40cmを測る大形柱穴を2基、第2調査区では径約50cmを測る大形柱穴を2基と径20～30cmを測る小形柱穴を3基、第3調査区では径約50cmを測る大形柱穴を1基と径約20cmを測る小形柱穴を2基、第4調査区では径約50cmを測る大形柱穴を1基と径約20cmを計る小形柱穴を1基、各々検出した。各柱穴の覆土中からは土器粒、炭などを検出したが、各々の時期を考察するには至らなかった。

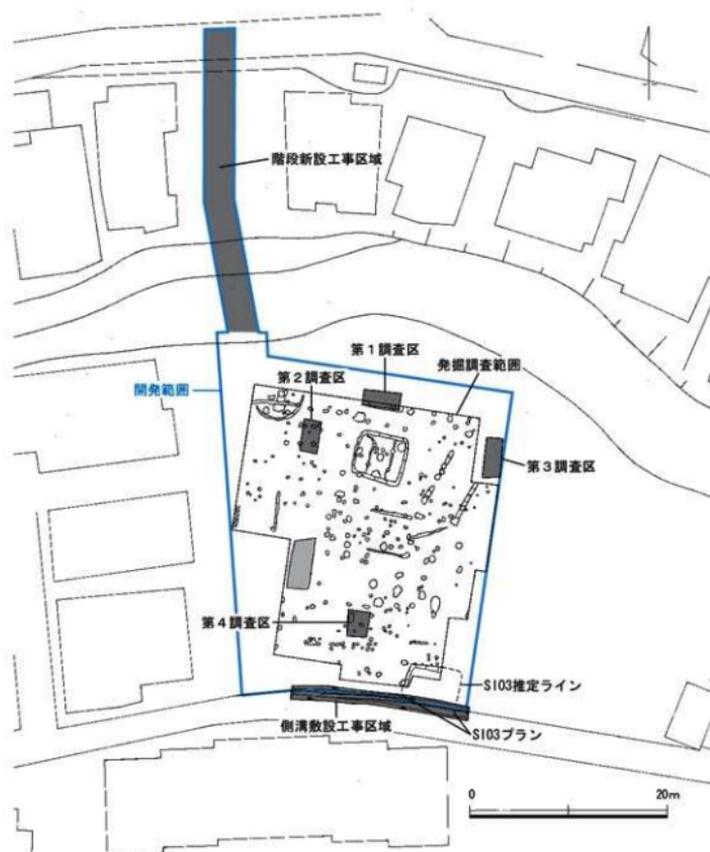
試掘調査の結果、時期等の詳細は不明であるが大小の柱穴跡をもつ建物跡が確認されると共にその分布状況は計画地全域に広がることが分かった。

第3節 工事立会調査

工事立会調査は、計画地の北側の階段新設工事区域と南側の市道京塚宇賀池線に隣接する側溝敷設工事区域の2ヶ所についておこなった。

まず階段部分の立会調査についてであるが、対象区域は北側に向かって急激に落ちる自然地形を呈し現在では一部擁壁が作られ、盛土造成され宅地になっている。新設計画はこのような状態に一部の擁壁の撤去、造成して階段を作るものである。よって掘削範囲は階段の最上段のみであり、南側の隣接箇所には第3章で紹介するS101が検出されている。掘削は表土下35cm(表土内)で終了したので、写真撮影のみで終了した。

次に、市道京塚宇賀池線に隣接する側溝敷設工事区域についてであるが、市道の北側に隣接して側溝を新設するもので、側溝の東端は第3章で紹介するS103の南側にあたる。掘削は地山面を検出した深度で終了し、その深度は表土下69cmを計る。地山面を精査したところ、S103の東西の壁と思われるプランを確認し、その東西幅は約5.7mを計測した。またこの東西壁を示すプランを切る形で幅約50cmの東西方向の溝状遺構を確認した。遺物は土器器と思われる土器細片が出土したが、時期等詳細については不明であった。S103の規模が辺5.7m程を測るものであれば、規模・形状共にS102と遜色ないものとなり、この後廻遺跡の性格がより一歩解明できると思われる。



第2図 試掘・工事立会調査図 (1:500)

第2章 位置と環境

松江市は島根県北東部に位置する。松江市街地は東を中海、西を宍道湖の両湖に挟まれており、宍道湖東岸の松江平野に立地している。松江平野は、縄文海進によって古宍道湾が形成した砂州に河川による沖積作用で堆積した沖積地を基盤としている。そのため、比較的小さな河川が多く低温である。

松江平野の北東には標高297mの嵩山、同261mの和久羅山からなる峻険な山地が存在し、中海まで続く。また、北方も白鹿山等からなる湖北山地が占めている。北西には平野部が続き、佐陀川が形成する沖積地に接続する。これらに対し、市街地南郊には乃木段丘と呼称される大型段丘が広範囲に渡って広がる。乃木段丘は東西に大きく二手に分かれており、西端は宍道湖に、東端は意宇平野に面している。

後廻遺跡(1)は乃木段丘の西側の一角、小高い丘陵が連なる尾根上に位置している。遺跡の周囲は住宅地が密集しているが北西方向には開けており、床几山を含む北側の段丘を望むことができる。

旧石器時代 後廻遺跡周辺で旧石器時代の遺構は確認されていないが、廻田遺跡(35)、田和山遺跡群(61)で旧石器時代の玉髄製のナイフ形石器が出土していることなどから、今後当該期の遺跡が見つかる可能性が考えられる。

縄文時代 後廻遺跡周辺では、縄文土器が出土した大角山遺跡(34)、福富Ⅰ遺跡(42)、松本古墳群(46)、二ツ縄手遺跡(57)、田和山遺跡群、袋尻遺跡群(65)を始めとし、有舌尖頭器が採取された福富湖岸遺跡(18)、石鏡の散布地である下沢遺跡(73)、奥山遺跡(75)、石斧が採取された屋形遺跡(39)、乃白遺跡(56)などが知られるが、いずれも明確な遺構を伴うものではない。今後、この時代の遺構が発見される可能性もあるが、これまでの調査成果を見る限り、後廻遺跡周辺は縄文遺跡の希薄な一帯と言える。

弥生時代 後廻遺跡の北側には宇賀Ⅰ遺跡(2)、北西側には宇賀Ⅱ遺跡(3)が所在する。いずれも石斧を採取した散布地であり、詳細は不明である。本遺跡付近にはこの2遺跡の他に遺跡が確認されていないのが現状である。

後廻遺跡の南西側には弥生時代の遺跡が広範囲に渡って多数発見されている。このうち弥生前期にあたる遺跡は、神立遺跡(36)、欠田遺跡(37)、門田遺跡(38)、雲垣遺跡(55)、二ツ縄手遺跡、友田遺跡(59)、田和山遺跡群、薬師前遺跡(63)などが知られる。欠田遺跡は弥生前期新段階～古墳前期までの遺物が出土している遺跡である。田和山遺跡群は国史跡の遺跡公園としても知られ、弥生前期末の環壕や多数の遺物が検出されている。



第3図 後廻遺跡位置図(1:50000)



- | | | | |
|---------------|---------------|-----------|------------|
| 1 後継遺跡 | 23 永保山窯跡 | 45 屋形古墳群 | 67 菅沢遺跡 |
| 2 宇賀Ⅰ遺跡 | 24 立平窯跡 | 46 松本古墳 | 68 大久保古墳群 |
| 3 宇賀Ⅱ遺跡 | 25 布志名城山跡 | 47 松本古墳 | 69 菅沢谷横穴群 |
| 4 経塚古墳 | 26 小川古墳群 | 48 弥陀原横穴群 | 70 塚田遺跡 |
| 5 向荒神古墳 | 27 外瀬古墳群 | 49 松本横穴群 | 71 二子塚古墳 |
| 6 奥金見古墳群 | 28 菅山古墳群 | 50 岩屋口古墳 | 72 乃木二子塚古墳 |
| 7 室瀬古墳群 | 29 佐富士名朝官義綱古墓 | 51 松本修法壇跡 | 73 下沢遺跡 |
| 8 浅井横穴群 | 30 布志名大谷Ⅰ遺跡 | 52 勝負原横穴群 | 74 長砂古墳群 |
| 9 小沢横穴群 | 31 布志名才の神遺跡 | 53 乃白横穴遺跡 | 75 奥山遺跡 |
| 10 城ノ前古墳群 | 32 野宮窯跡 | 54 福富Ⅱ遺跡 | 76 奥山古墳群 |
| 11 西城ノ前遺跡 | 33 大角山古墳群 | 55 雲塚遺跡 | 77 矢の原遺跡 |
| 12 榎山古墳群 | 34 大角山遺跡 | 56 乃白遺跡 | 78 勝負谷遺跡 |
| 13 西ノ原遺跡 | 35 銅田遺跡 | 57 ニノ殿平遺跡 | 79 櫻松遺跡 |
| 14 松江藩主堀尾忠晴墓所 | 36 神立遺跡 | 58 南原古墳群 | 80 深田遺跡 |
| 15 鹿砂門山古墳群 | 37 欠田遺跡 | 59 友田遺跡 | 81 勝負谷古墳群 |
| 16 寛神古墳 | 38 門田遺跡 | 60 南友田遺跡 | 82 小倉見谷横穴群 |
| 17 佐佐々木高綱墓 | 39 屋形遺跡 | 61 田和山古墳群 | 83 洪ヶ谷遺跡群 |
| 18 福富湖畔遺跡 | 40 蓮華塚遺跡 | 62 田和山古墳群 | 84 神田遺跡 |
| 19 二名留古墳群 | 41 松本遺跡 | 63 薬師前遺跡 | 85 862古墳群 |
| 20 布志名大谷Ⅱ遺跡 | 42 福富Ⅰ遺跡 | 64 後友田古墳 | 86 鏡池遺跡 |
| 21 茂芳日遺跡 | 43 乃白玉作跡 | 65 渡尻遺跡群 | 87 菅ノ木池遺跡 |
| 22 布志名大谷Ⅲ遺跡 | 44 森木谷古墳 | 66 野向古墳 | |

第4図 周辺の遺跡分布図 (1:25000)

第2章 位置と環境

友田遺跡は弥生前期の土壇墓群や中期の墳丘墓、四隅突出型墳丘墓などが検出されており、石鏃が34点まとまって出土し、戦士の墓と言われる土壇墓も検出されている。

弥生中期の遺跡は、三重の環壕や多数の建物跡が検出された田和山遺跡群や、出雲市の青木遺跡⁽¹⁾に次ぐ県内最古の部類に属する四隅突出型墳丘墓を検出している友田遺跡などが著名である。その他、同時代の土器が出土する欠田遺跡、福富Ⅰ遺跡、袋尻遺跡群、溝を検出した門田遺跡、木織などの木製品が出土した雲垣遺跡などが知られる。

弥生後期の遺跡は、福富Ⅰ遺跡、廻田遺跡で竪穴住居跡が検出されている。また、後期の土器が出土したものと欠田遺跡、友田遺跡、南友田遺跡(60)、二ツ縄手遺跡、門田遺跡、袋尻遺跡群などがあげられる。

古墳時代 古墳時代に入ると松江平野周辺は遺跡が急増するが、それらの多くは古墳、横穴墓である。山地、丘陵端部を中心として、至る所に古墳が築かれた状況が伺われる。

古墳前期段階では、袋尻遺跡群で土壇墓1基、土器棺墓2基が検出されている。その後、長砂古墳群(74)で5世紀中葉の古式須恵器が出土しており、以下、乃木二子塚古墳(72)、二子塚古墳(71)、田和山1号墳(62 田和山古墳群内)と連続的に古墳が築造されている。田和山1号墳は6世紀後葉の前方後円墳(全長約20m)で、田和山丘陵の南東部の尾根を利用して築かれている。ここからは大刀、鉄鏃などが出土しており、後期の前方後円墳として極めて特異な例と言える。

群集墳としては、袋尻遺跡群で横穴墓15基(69 菅沢谷横穴群を含む)が検出された。時期は6世紀後半で、出土遺物に時期的幅が認められることから、追葬により長期に渡って使用された状況が窺える。

古墳時代の集落遺跡としては、数多くの玉作集落が認められ一特色を示している。これは、松江市玉湯町にある花仙山(玉作山)が、玉の原材料としての瑪瑙、碧玉を産する山であることを主要因とする。そのような玉作に関すると思われる遺跡として、大角山遺跡、福富Ⅰ遺跡、乃白玉作跡(43)などが周辺に分布している。

歴史時代 645年の大化の改新によって国郡制が施行されると、現在の島根県は出雲、石見、隠岐の3国体制で成立した。出雲国の中枢である国府は本遺跡の南東4.5kmに位置しており、周辺には官衙的施設が集中して配置されている。大化2年には大化葬令が出され、全国的に古墳の築造は減少に向かう。しかし、松江平野周辺では引き続き古墳が造られ(終末期古墳)、一部は8世紀まで存続している。

また、松本古墳群、勝負谷遺跡(78)、措松遺跡(79)、深田遺跡(80)では古代道路の一部と思われる遺構が検出されている。これは、この地域が交通の要として繁栄していた様子を窺わせるものである。

註

(1) 島根県教育委員会 2006『青木遺跡Ⅱ』

参考文献

島根県教育委員会 2003『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ(出雲・隠岐編)』

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と基本層序

1. 調査の概要 (第5～7図)

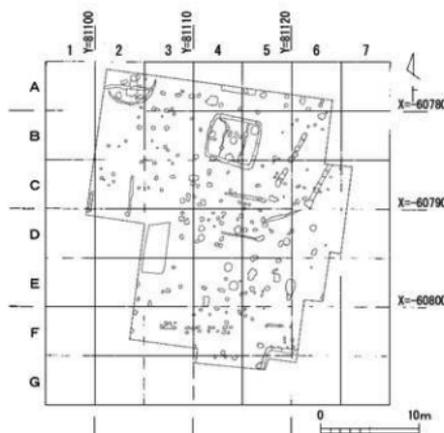
調査地は東西に延びる単独丘陵の頂部付近に位置する。丘陵頂部は緩やかな斜面が南北に傾斜しており、住居地としての平坦な面が比較的広く確保できる地形を成している。

調査時の現況は宅地に囲まれた畑地で、北～北西方向には市街地が眼下に望める眺望のよい場所となっている。

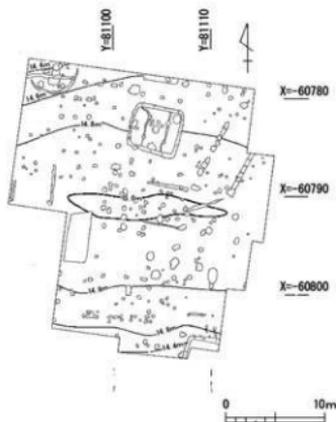
調査は開発面積 (980 m²) のうち、建築物の地下構造の影響を受ける 650 m² について行った。

調査の方法は、調査区を国土座標に当てはめ、 $X = -60775$ と $Y = 81095$ の交点を基点とし、南へ A・B・C…、東へ 1・2・3…と 5 m メッシュでグリッドを設定し、遺構に伴わない遺物などはグリッド毎に取り上げた。遺構番号については調査時と報告書刊行後の混乱を避けるため、調査時に使用した種別に関係なく付けた連番をそのまま本報告書に使用した。

今回の調査では、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡 1 棟と掘立柱建物跡 1 棟、弥生時代後期後半の布掘り掘立柱建物跡 3 棟、古墳時代前期の竪穴建物跡 2 棟、掘立柱建物跡 3 棟、柱穴列 1 列、溝 1 条と調査区内に散在する 209 基の柱穴を検出することができた。なお、柱穴の中にはその埋土の状況から、近代の柱穴も混在していると思われる。遺物については、検出した遺構の時期を示す弥生時代中期末～古墳時代前期の土器がコンテナ 8 箱、砥石・石鏃などの石器が 6 点出土している。これら遺物の大半は柱穴内や竪穴建物跡内から出土しており、遺構面を覆う土層からの出土はほとんど見られない。また、出土した土器に関しては、そのほとんどが小片 (破片) であり、実測図や写真の掲



第5図 調査グリッド配置図 (1:500)



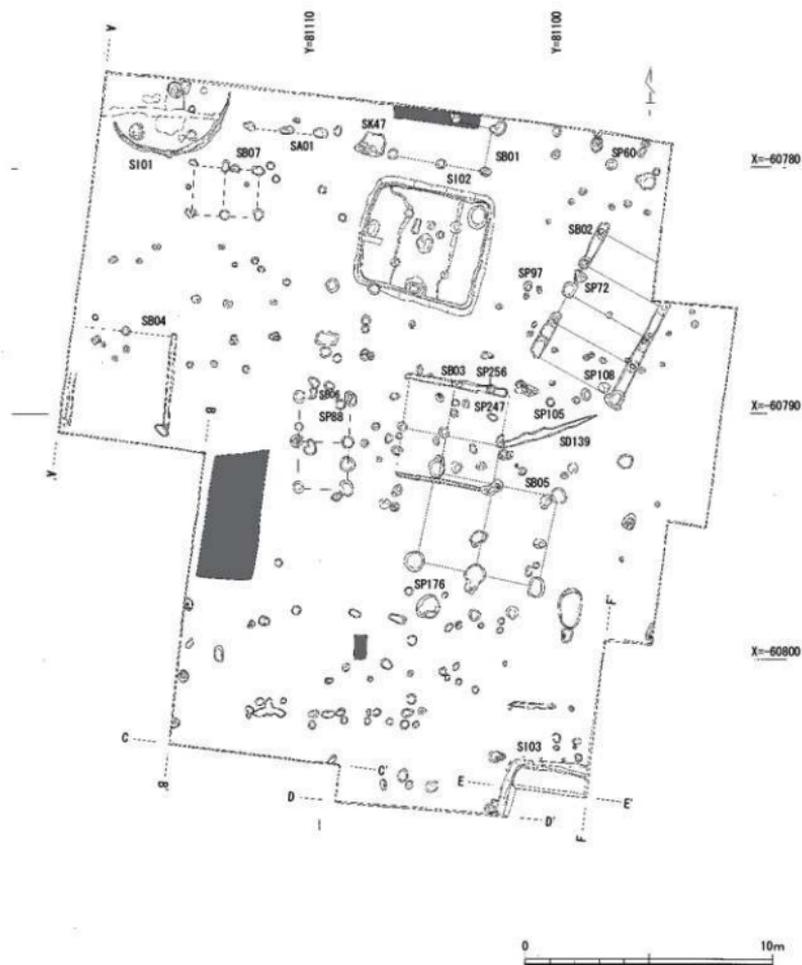
第6図 調査後 等高線図 (1:500)

第3章 調査の成果

載が出来なかった多くの土器が出土していることを記しておく。

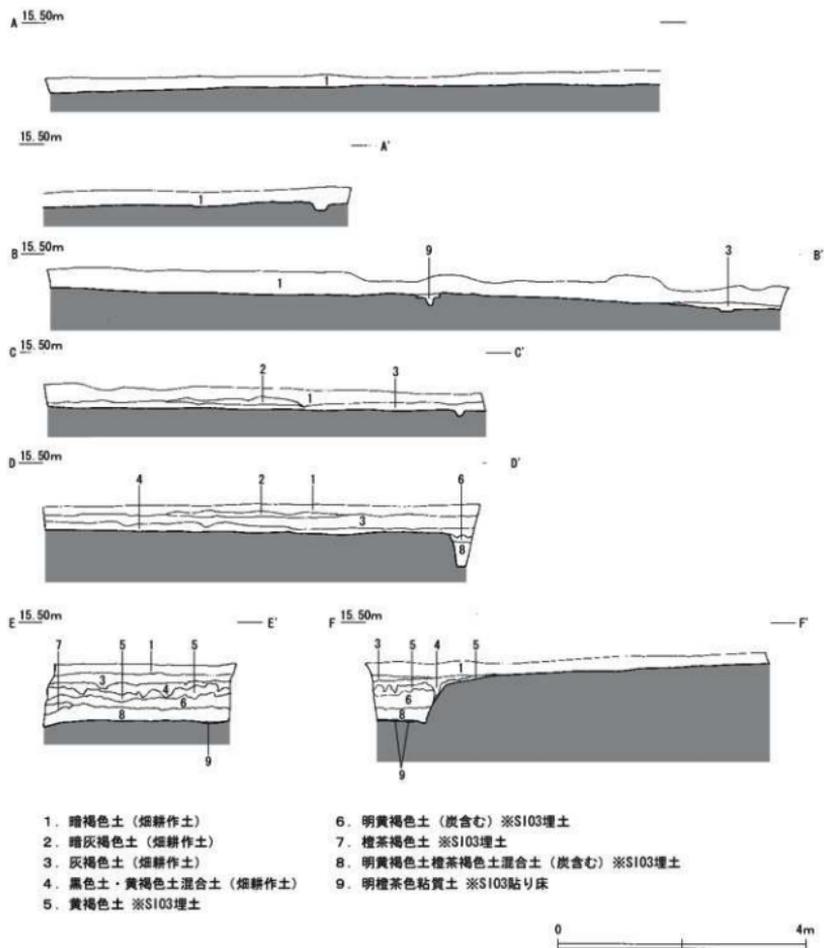
2. 基本層序 (第7・8図)

調査区内の現地表面の標高は14.6～15.4mを測り、調査区中央を頂点とし南北に緩やかに下っている。遺構面においても現地表面と同様な地形を成し、その標高は14.3～15.1mを測る。



第7図 後彌遺跡 遺構配置図 (1:200)

遺構面までの土層は、調査区の中央から北側が第1層の暗褐色土のみで、南側が第1層と第2層の暗灰褐色土、第3層の灰褐色土、第4層の黒色土・黄褐色土の混合土となっている。これらの土層はいずれも近現代の畑耕作土であり、遺構面である明橙茶色の地山面には畑の耕作に使用したであろう機械の筋状の痕跡が広範囲で確認されている。このような状況から、遺構面は幾分か削平されており、遺構が使用されていた当時の面はもう少し高い位置に存在していたものと考えられる。



第8図 後彌遺跡 調査区土層図 (1:80)

第2節 遺構と遺物

今回の調査で検出した主たる遺構を古い時期から述べていく。但し、建物跡を示すことができなかった柱穴や時期が判別できなかった遺構などについては、ここでは取り上げないものとする。

(位置などは第7図 後廻遺跡 遺構配置図を参照して頂きたい。)

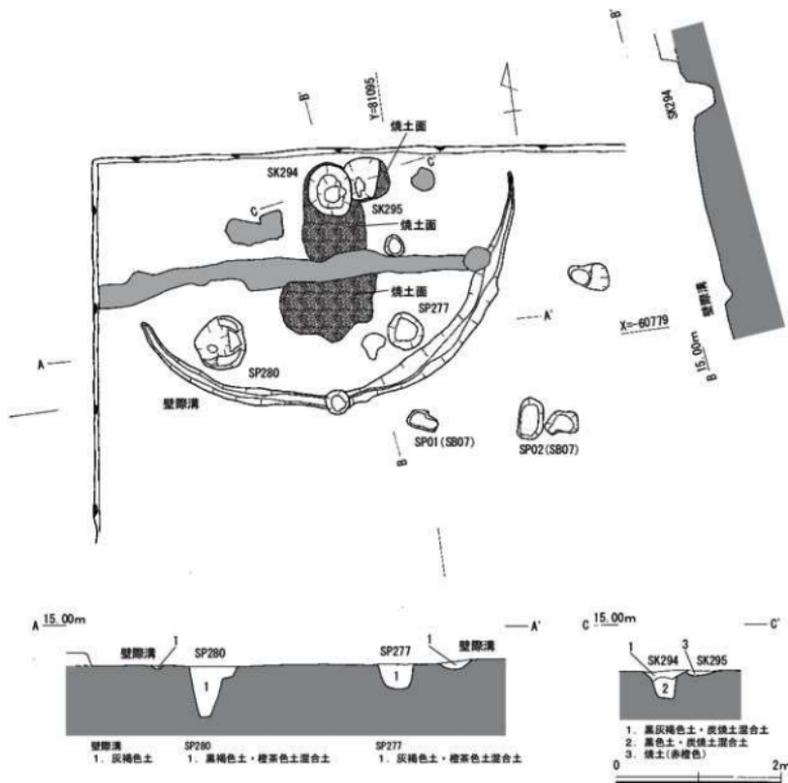
1. 弥生時代の遺構

竪穴建物跡 S101 (第7・9・10図、図版2・16)

調査区の北西端、A2・A3 グリッドに位置する竪穴建物跡である。

後世の削平をうけていることから遺構の残存度は悪く、本来あった竪穴部の埋土及び竪穴壁は残存していない。また、竪穴部中央も東西方向の現代の溝で攪乱をうけている。

平面形は円形を呈し、竪穴部内の中央付近に中央ピット SK294 や浅い焼土坑 SK295、焼土面、南側



第9図 S101 平面図・断面図 (1:60)

の壁際溝沿いに支柱穴 SP277・SP280 を検出している。建物跡の平面規模は北側が調査区外のため正確には分からないが、検出した支柱穴の位置や壁際溝から、5 m 前後の規模をもった支柱 5 本で構成されたものと考えられる。

支柱穴 SP277-SP280 の柱間は 2.3 m を測り、壁際溝近くに配置されている。支柱穴の深さは SP277 が 30 cm、SP280 が 63 cm を測るが、SP280 は樹木の根が底面まで入り込んでいたことから、本来の深さより深くになっていることが想定される。

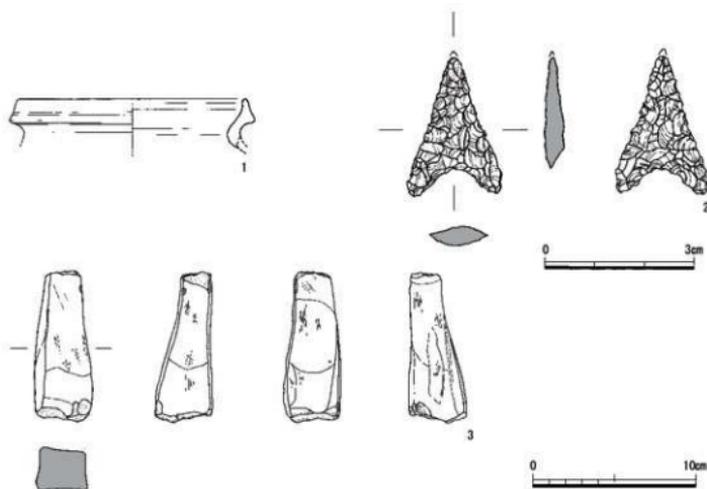
中央ピット SK294 は深さ 32 cm を測り、南北に長いやや楕円形を呈す。底から 25 cm 程度まで焼土が堆積していることや、この中央ピットから南へ延びる焼土面が検出されていることから、火に関わる用途として使用された土坑と考えられる。

遺物は、SK294 埋土の上層から弥生時代中期末～後期初頭の甕片、南側の壁際溝付近から石鏃と砥石が出土している。

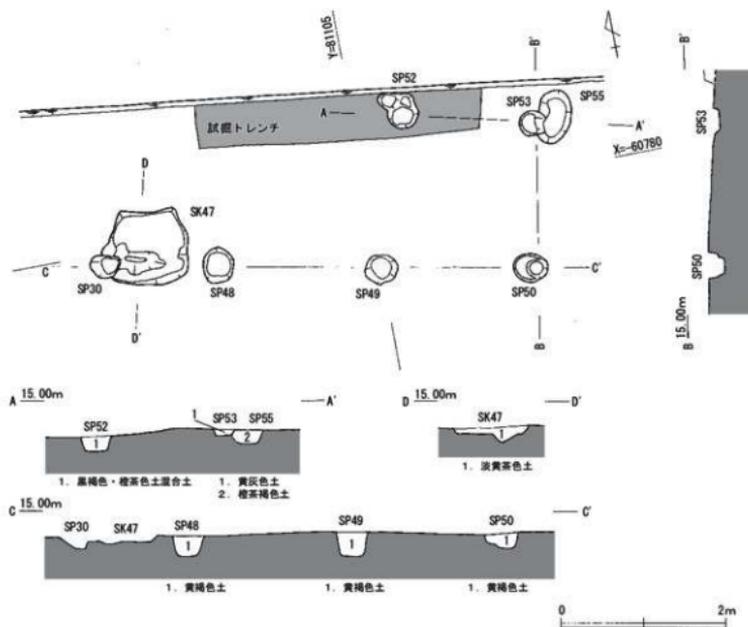
SI01 の時期は出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭頃と考えられる。

出土遺物（第 10 図、図版 16）

1 は SK294 から出土した甕である。口縁部は上下ともに丸みを帯びる形状を呈する。口縁部外面に 2 条の擬回線文を施したと思われるが、摩滅しているため不明瞭である。外面の一部に煤と思われる黒色の付着物が見られる。IV-2 もしくは V-1 様式⁽¹⁾のものと思われる。2 は壁際溝付近から出土した黒曜石製の石鏃である。形態は回基式⁽²⁾を呈し、先端部は欠損している。3 は凝灰岩製の砥石である。全側面に砥面が見られ、使用の顕著さが窺える。



第10図 SI01 出土遺物図 (1・3は1:3、2は1:1)



第11図 SB01・SK47 平面図・断面図 (1:60)

掘立柱建物跡 SB01 (第7・11・12図、図版3・16)

調査区の北端、A4・A5・B5 グリッドで検出した掘立柱建物跡である。

調査区外の北側へ建物跡の続く可能性も考えられるこ

とから確定はできないが、平面構造は2間×1間以上であったと考えられる。平面規模は3.9m×1.75m以上を測り、平面形は検出した状態で東西に長い長方形を呈す。

柱穴間の距離は南北方向の短軸 SP50-SP53 間が1.75m、東西方向の長軸 SP50-SP49 間が1.85m、SP49-SP48 が2.0mを測り、1間分の距離が短軸より長軸が長い構造となっている。

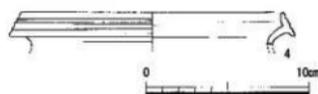
柱穴の深さは20～30cmを測り、さほど深いものではない。また、柱穴内の埋土は南側に並ぶ SP48・SP49・SP50 が黄褐色土の同一埋土であった。

遺物は SP48 から弥生時代中期末～後期初頭の甕片が出土している。

SB01 の時期は出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭頃と思われる。

出土遺物 (第12図、図版16)

4 は SP48 から出土した弥生土器の甕である。口縁端部は上下の拡張が大きく、先端が尖る傾向に



第12図 SB01 出土遺物図 (1:3)

ある。平坦面の内傾はわずかで直立気味の形状を呈し、4条の擬凹線文を施す。IV-2様式かV-1様式のものと思われる。

土坑 SK47 (第7・11・13図、図版3・16)

調査区の北端、A4グリッドで検出した土坑である。

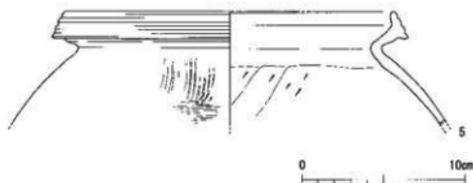
前述のSB01の西側、SP48に近接する場所で検出している。平面形はやや歪な長方形形状を呈し、長軸100cm、短軸87cm、深さは6～18cmを測る。土坑内の埋土は淡黄茶色土の単層であった。

用途など、その性格は明らかではないが、弥生時代中期末～後期初頭の甕の他、30点以上の土器小片が出土している。

SK47の時期は出土遺物から、近接するSB01と同様、弥生時代中期末～後期初頭頃と思われる。

出土遺物 (第13図、図版16)

5は弥生土器の甕である。口縁端部は上下に広く拡張し、平坦面は強めに内傾する。口縁部外面は幅広く浅い明確な擬凹線文を3条施す。肩部外面には部分的に縦・横方向の粗いハケ目調整が見られ、内面はヘラ



第13図 SK47 出土遺物図 (1:3)

削りで調整しているが、単位はやや不明瞭である。IV-2かV-1様式のものと思われる。

布張り掘立柱建物跡 SB02 (第7・14～16図、図版3・4・16)

調査区の北東、B6・C5・C6グリッドに位置する布張り構造をもつ掘立柱建物跡である。

北東側の一部は調査区外へ続くため検出できていないが、遺構の大半は確認することができた。建物跡は西側の2条の溝、東側の1条の溝と柱穴10基で構成され、その規模は長軸(桁行)5.6m、短軸(梁間)3.7mを測る。平面形は桁行が長い、長方形形状を呈している。

西側の桁行は柱穴2基(SP254・SP266)が掘り込まれた溝SD71と単独の柱穴SP73と柱穴2基(SP267・SP261)が掘り込まれた溝SD99が直線上に並んでいる。また、東側の桁行は柱穴4基(SP118・SP265・SP264・SP271)が掘り込まれた溝SD117が西のSD71・SP73・SD99と並列する形で作られている。

建物の平面構造は梁間1間×桁行4間と基本的には考えるが、梁間が3.7mと長いことや、中央で検出された浅い小型の柱穴SP114が建物跡の柱穴になるとすれば、梁間2間×桁行4間であった可能性も否定できない。また、桁行の柱穴は外側にあたる北側と南側の1間が1.5m、中の2間が1.2～1.3mと桁行間距離が内側に対し外側が長い構造をしている。

溝と柱穴の関係については土層断面より、①溝を埋める前に掘られたもの[SP261・SP267・SP271]、②溝を埋めてから掘られたもの[SP254・SP266・SP118・SP265・SP264]と相違性が見られるが、これらの違いは建て替えが行われた痕跡と考えておく。即ち、溝内の柱穴は当初、すべて①の状態であ

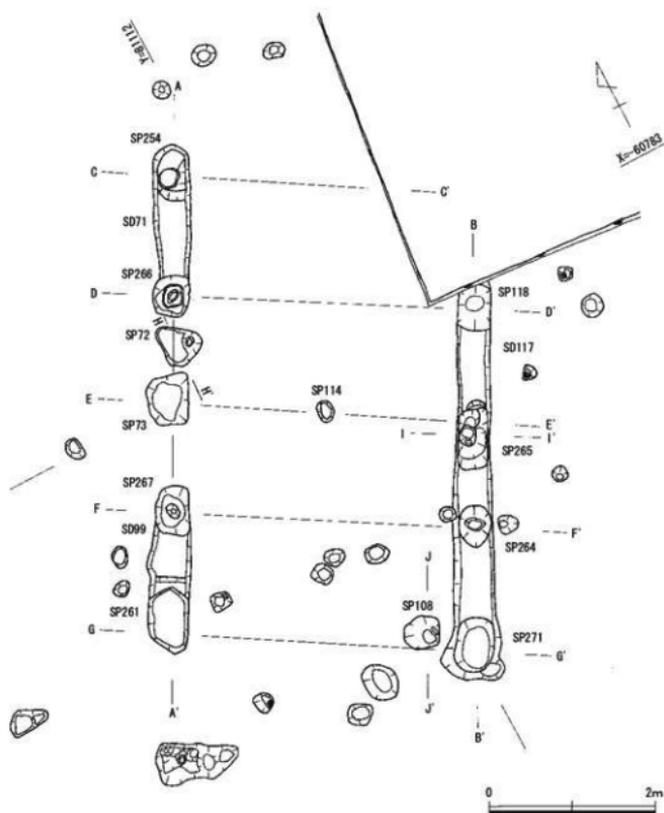
第3章 調査の成果

り、溝を作った後、柱穴を掘り、柱を据え、溝と柱穴が同時に埋められたものと解釈しておきたい。なお、柱穴SP265は2～3回の掘り直しが確認されており、SB02が建て替えられたことを示唆している。

その他、SP72とSP108の埋土からは5～9cm大の焼粘土塊を20個体検出している。この粘土塊は焼けており、SP72では穿孔が見られるもの2個体、SP108では土器を挟んだもの1個体が見られた。また、挟まれた土器は土師器と思われることから、SB02には伴わないと考えられる。

他の柱穴からも同様な粘土塊が検出されており、遺物図を含め、その詳細は「2. 古墳時代の遺構」の最後で述べるものとする。

SB02からの遺物は、SP73、SP267、SP261、SP265、SP267から土器小片が数点、SD117から弥生土器の底部が出土している。

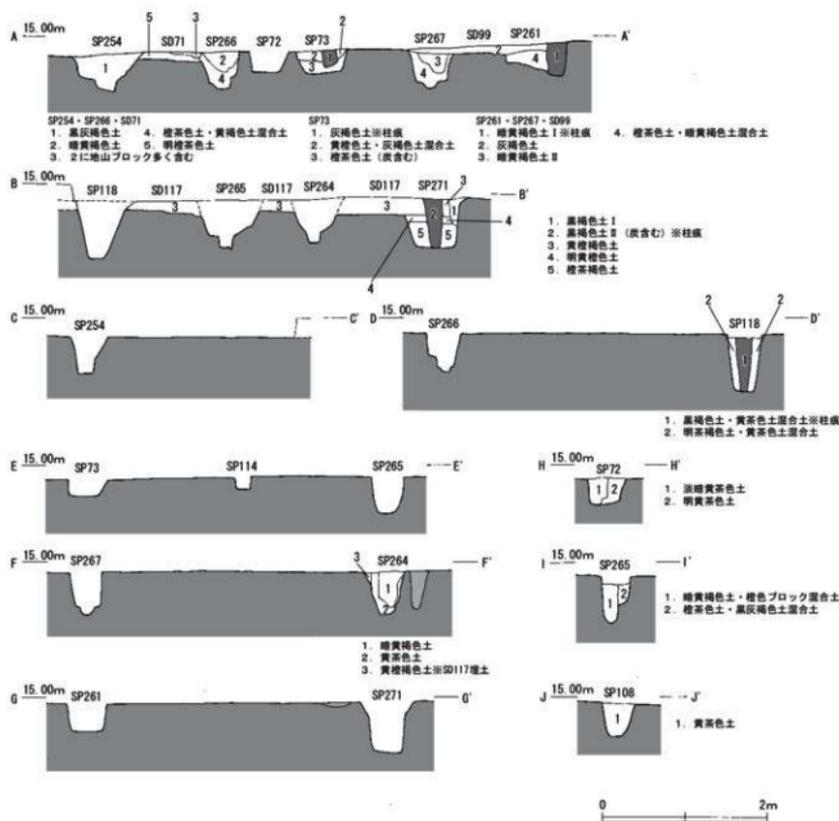


第14図 SB02 平面図 (1:60)

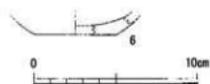
SB02の時期は出土遺物から弥生時代中期か後期と推測されるが、後述するSB03が同じ布掘り構造をもつ掘立柱建物跡であることから、同時代の弥生時代後期後半頃と考えておく。

出土遺物（第16図、図版16）

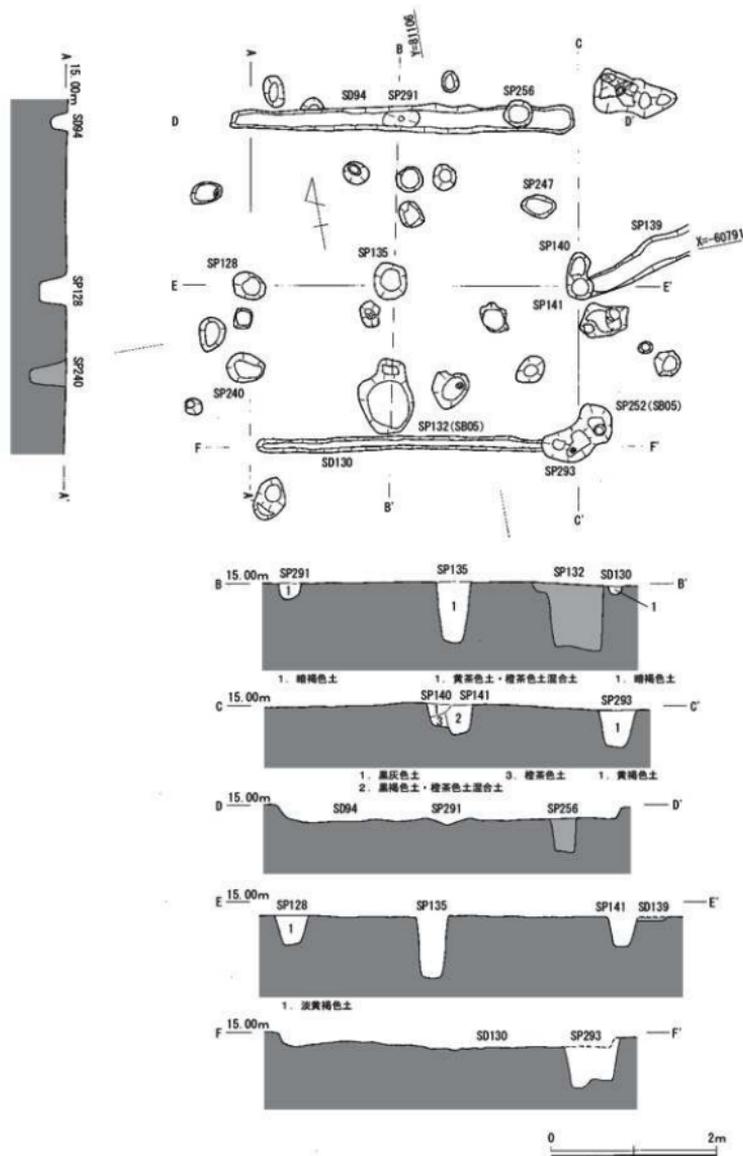
6はSD117から出土した弥生土器の壺か甕の底部である。底部は平底で、復元底径4.8cmを測る。土器の胎土から弥生時代中期か後期のものと思われる。



第15図 SB02 断面図 (1:60)



第16図 SB02 出土遺物図 (1:3)



第17図 SB03 平面図・断面図 (1:60)

布掘り掘立柱建物跡 SB03 (第7・17・18図、図版4・16)

調査区のほぼ中央、C4・C5・D4・D5グリッドで検出した布掘り構造をもつ掘立柱建物跡である。

建物跡は北側と南側の2条の溝と柱穴5基で構成されている。平面構造は2間×2間で、平面規模は長軸(桁行)4.0m、短軸(梁間)4.0mを測る。平面形はほぼ正方形状を呈すが、東西方向の桁行の中央は西側1間が1.7m、東側の1間が2.3mとやや西側へ寄っている。

桁行は北側が溝SD94と溝SD94の中央に掘られた柱穴SP291、中央が柱穴SP128・SP135・SP141、南側がSD130と東端のSP293で構成される。なお、桁行の溝内で検出できた柱穴はSP291のみであったことから、梁間は東端の柱穴SP293-SP141と中央の柱穴SP135-SP291が対になるのみで、他の柱穴に対応する柱穴は見当たらない。

柱穴の深さはSP128・SP141が35cmであるのに対し、中央のSP135は75cmと極端に深いものであった。SD94内の柱穴SP291の深さは8cmと、柱の窪み程度の浅いものである。

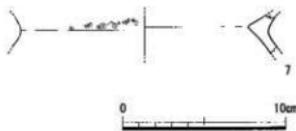
前述のSB02で見られた、建て替えに関する痕跡はこの建物跡では見つかっていない。

遺物は、SD94、SP128から土器片が数点出土しているが、小片であることから図化はしていない。なお、SD94を切る形で検出したSB03より新しい柱穴SP256からは土師器の甕片が出土している。

SB03の時期は出土遺物から特定することはできなかったが、布掘りであることなど後述するSB04と平面構造が近似することから、同時代の弥生時代後期後半頃と考えておきたい。

出土遺物(第18図、図版16)

7はSB03より新しい柱穴SP256から出土した単純口縁の甕である。外面には縦方向のハケ目がうっすら確認できる。草田7期に相当するものか。



第18図 SP256 出土遺物図(1:3)

布掘り掘立柱建物跡 SB04 (第7・19・20図、図版5・16)

調査区の西側、C2・D2グリッドで検出した布掘り構造をもつ掘立柱建物跡である。

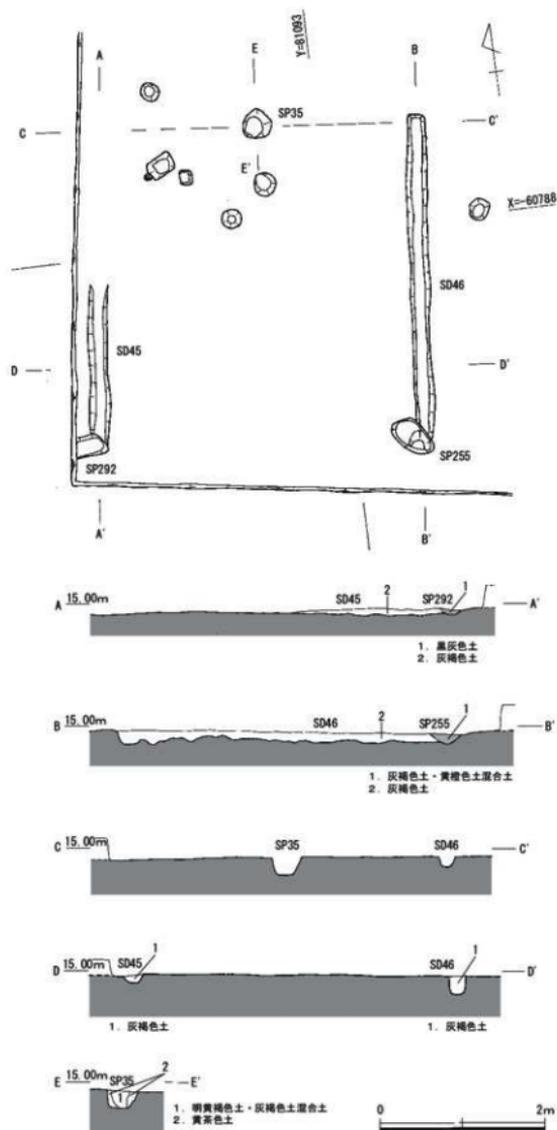
建物跡は東側と西側の2条の溝と柱穴1基で構成されている。前述のSB03と形態が近似することから同様な掘立柱建物跡と判断した。

平面構造は梁間と想定される東西が2間、桁行は不明である。平面規模は南側の両溝端がSB04より新しい柱穴で切られていることから桁行は明確でないが、梁間3.9~4.0m、桁行は4.0m前後を測るものであった。平面形はほぼ正方形状を呈している。

桁行は西側が溝SD45、東側が溝SD46で構成され、梁間はSD45とSD46の北側の中間で検出した柱穴SP35のみが梁間に関する遺構となる。このSP35とSD46間は1.95mを測る。桁行の溝SD45・SD46の形態はSB03と近似しており、SB02のような柱穴は伴っていない。なお、棟持柱と想定されるSP35の深さは20cmで比較的浅いものだったが、土層断面より柱の痕跡を確認している。

この建物跡もSB03同様、建て替えに関する形跡は見つかっていない。

遺物はSD46から弥生時代後期後半の甕片が出土している。



第19図 SB04 平面図・断面図 (1:60)

SB04の時期は出土遺物から弥生時代後期後半頃と思われる。

出土遺物(第20図、図版16)

8はSD46から出土した弥生土器の複合口縁の甕である。口縁部は短く肥厚し、端部は平坦面をもつ形状を呈する。擬凹線文を施した後、端部付近をナデ消している。肩部以下内面はヘラ削りで調整している。V-3様式(草田3期)のものと思われる。



第20図 SB04 出土遺物図(1:3)

柱穴・遺構外出土遺物(第7・21図、図版16)

調査区内からは266基の柱穴を検出しているが、その中で建物跡を示すことができなかった弥生時代の遺物を埋土に包含する柱穴、または遺構外出土遺物をここで述べておく。

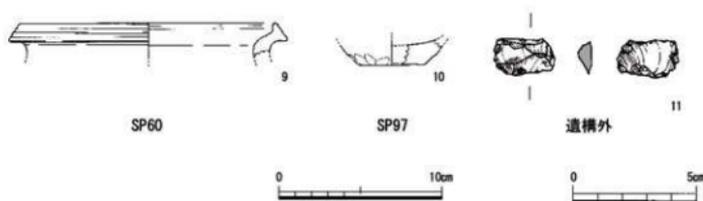
柱穴SP60は調査区の北東端、A6グリッドで検出した。径24~48cmの楕円形を呈し、深さは69cmを測る。埋土は橙茶色土の単層で弥生土器の甕片の他、土器小片が5点出土している。

柱穴SP97は調査区の北寄りのS102とSB02の間のC5グリッドで検出した。径20cmの円形を呈し、深さは27cmを測る。埋土は淡黄褐色土の単層で弥生土器の底部が出土している。

調査区の南端付近の遺構面からは黒曜石の石器未成品が出土している。黒曜石製の石器は古墳時代よりも弥生時代のほうが普遍的に用いられていることから、弥生時代のものと推測しておく。

出土遺物(第21図、図版16)

9はSP60から出土した弥生土器の甕である。口縁端部の拡張は狭く、口縁部外面にごく浅い擬凹線文が2条確認できる。IV-2様式に相当すると思われる。10はSP97から出土した弥生土器の甕または甕の底部である。底部は平底で、復元底径4.0cmを測る。底部付近では指頭圧痕がいくつか見られる。11は調査区南端付近の遺構面から出土した黒曜石製の石器未成品である。長軸の上下に石鏃などを作成する際に見られる人為的な剥離が見られる。



第21図 柱穴・遺構外 出土遺物図(9・10は1:3、11は1:2)

2. 古墳時代の遺構

竪穴建物跡 S102 (第7・22～31 図、図版6～12・16～18)

調査区の北側、B4・B5・C4・C5 グリッドに位置する竪穴建物跡である。

本遺跡では後世の削平をうけているため、遺構面が削られているような遺構が多いが、その中で保存状態がもっとも良かった遺構の一つである。

竪穴部を覆う埋土は3層に分かれ堆積していたが、上層の第1層の暗褐色土層では弥生土器など S102 外の周辺の遺構に関わる遺物も出土している。

竪穴部の平面形はほぼ正方形を呈するが、4隅のコーナーはやや丸みを帯びている。平面規模は4辺の中心で東西5.35 m、南北4.85 mを測り、同形態の竪穴建物跡としては大型の部類に入るものと思われる。竪穴壁は残りがよく、最も残りのよい南側で57 cmの高さ(深さ)が残存し、竪穴壁下部の際には深さ5～8 cmの壁際溝1が廻っている。床面には厚さ5～8 cmの橙茶色粘質土の貼り床が貼られ、東側と西側には主柱穴を境として一段高い床が作られている。この両側に作られた高い床面はベット状施設とも呼ばれ、縄文時代から古墳時代までほぼ全国的に散見されるようだが¹⁰⁾、県内においては類例を見ないものである。

竪穴部内では主柱穴4基(SP273・SP274・SP275・SP276)、中央ビットSK288、土坑5基(SK287・SK292・SK270・SK284・SK285)、溝SD296、柱穴SP286を検出した。

主柱穴は径33～52 cm、深さは32～45 cmを測り、主柱穴間は2.0～2.1 m間隔で正方形に並んでいる。これら主柱穴は床面が張られる前に掘られたもので、柱の痕跡も確認している。

中央ビットSK288は楕円形状の浅い土坑で、埋土は焼土・炭を多量に含んでいる。SK287も近似する埋土をもつことから、中央ビットSK288とSK287は火に関係する土坑と考えられる。また、床面で検出した焼土面はこれらを覆うように広がっている。SK288の埋土からは土師器片が10片出土している。

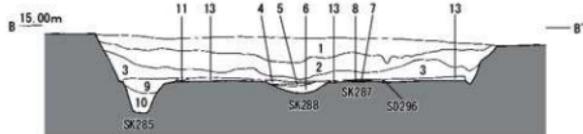
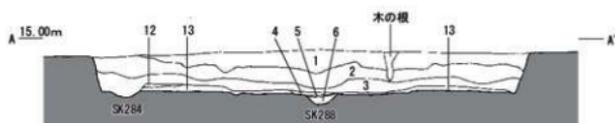
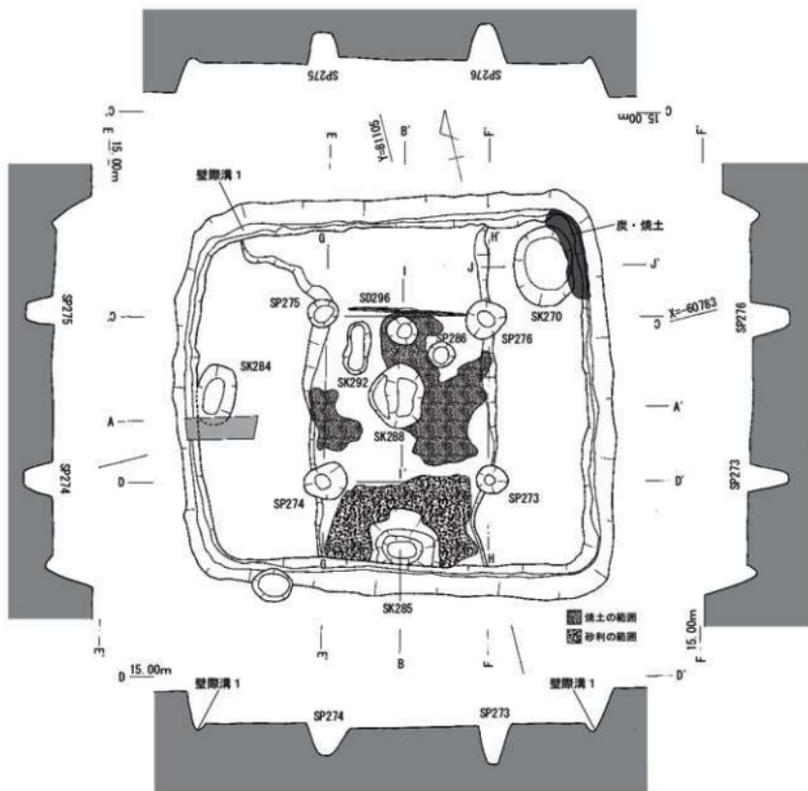
SK270は径70～95 cm、深さ41 cmを測る楕円形を呈した大型の土坑である。埋土からは土師器の甕片が出土している。

SK284は深さ17 cmの楕円形状の浅い土坑である。埋土からは土師器片が3点出土している。

SK285は竪穴壁南辺の中央に壁に接する形で作られた土坑である。平面形は上端が長方形で下端(底面)は楕円形を呈し、上端の南西側の中央一部が外に突出する変形的な形状を呈す。このSK285の周辺には1 cm以下の砂利が東西1.8 m、南北1.1 mの範囲に敷かれた面を検出している。砂利は貼り床に張り付いた状態で意図的に踏み固められたようにしっかりと張り付いており、一部はSK285内に入り込んでいた。これら状況から、砂利敷きはSK285を使用する際に必要なものであったものと推測できるが、SK285の性格が判然としないため、ここで何が行われていたのか現時点では不明と言わざるを得ない。ただ、SK285の埋土上層からは鼓形器台と高坏が出土しており、ここで何らかの祭祀的な行為が行われていたと考えられる。

SD296は主柱穴SP275～SP276間に位置する溝で、幅2～5 cm、長さ145 cm、深さ3～4 cmを測る。

幅が2～5 cmとかなり細いことから、掘って作られたものではなく、何かを差し込んだ痕とも思わ

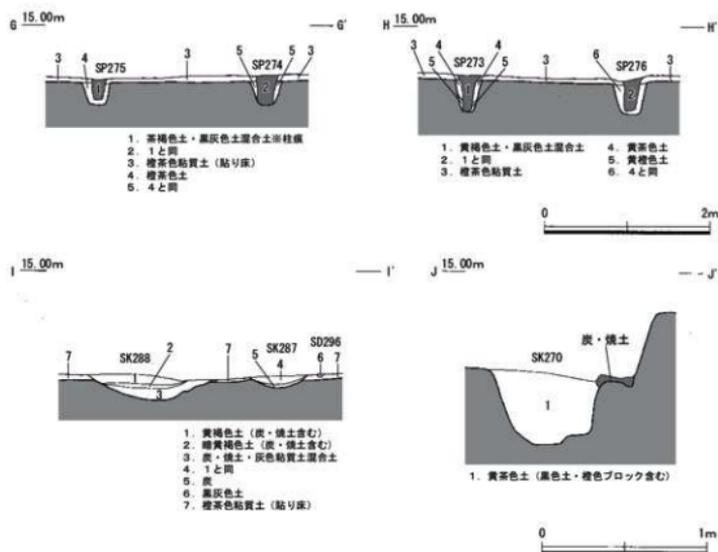


1. 暗褐色土 (灰含む)
2. 黄褐色土 (灰含む)
3. 暗褐色土 (灰含む)
4. 黄褐色土 I (灰・埴土含む)
5. 暗黄褐色土 I (灰・埴土含む)
6. 灰・埴土・灰色粘質土混成土
7. 黄褐色土 II
8. 灰
9. 暗黄褐色土 (黒色土混ざる)
10. 暗黄褐色土 (黒色土混ざる)
11. 砂利
12. 暗褐色粘質土 (粘り床)
13. 暗褐色粘質土 (粘り床)



第22図 S102 平面図・断面図 (1:60)

第3章 調査の成果



第23図 S102 断面図 上段 (1:60)、下段 (1:30)

れる。差し込んだとすれば、板状の木材、あるいは石材を考え得るが使用目的も合わせ、その詳細は分からない。

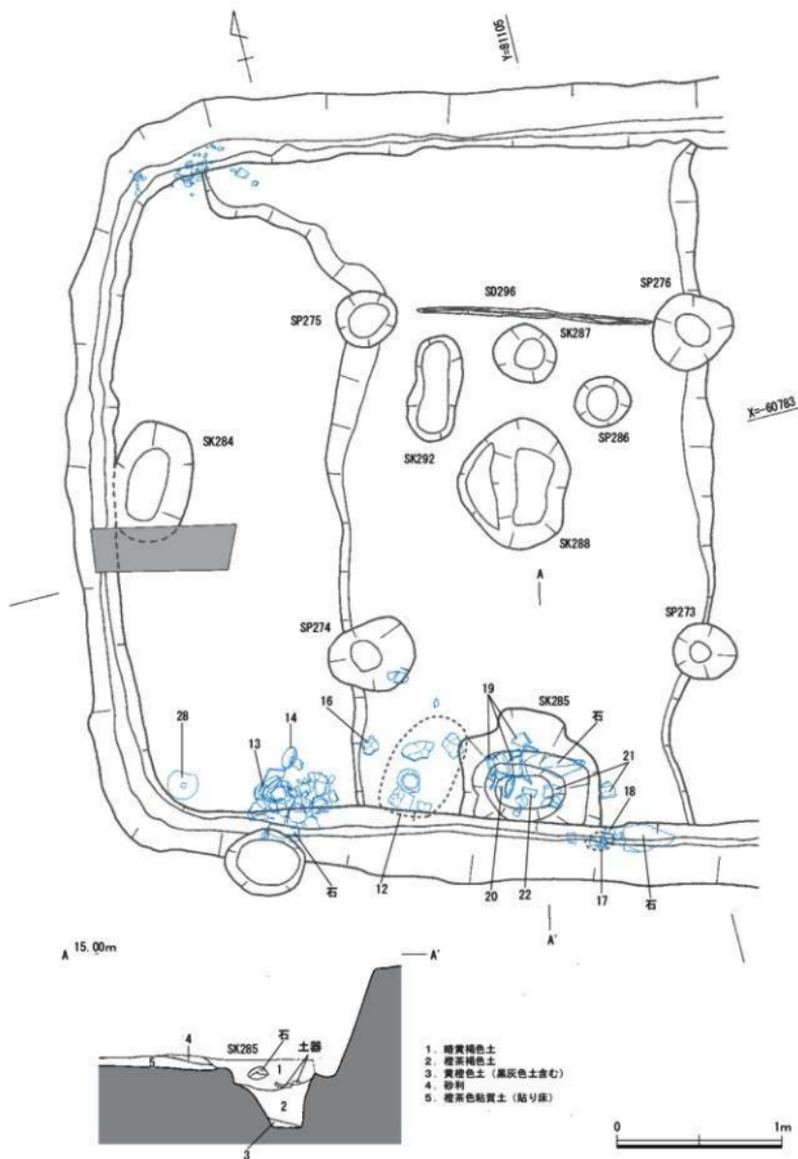
SP286は深さ27cmを測る柱穴である。埋土からは土師器片が2点出土している。

その他、床面からは遺物が集中して出土する場所が見られた（第24図）。北西のコーナーの壁際付近では土師器の甕片などが約80cmの範囲で散乱していた。小片なため図化はしていないが、少なくとも甕が3個体はあったようである。南西のコーナーでは土師器の高坏の脚部が置かれた状態で出土している。南側の壁際の西寄りでは甕片や高坏片が約50cmの範囲で集中して出土し、土師の南側の堅穴壁に板状の石が立て掛けられていた。これと同様な状況はSK285の東側でも見られ、土師器の小型壺片や手づくねの土器片、また、板状の石が堅穴壁際で出土している。他にSK285の西隣では土師器の壺が出土している。このように床面から出土した遺物は一部、北西のコーナーで検出しているが、そのほとんどが南の壁際に集中する傾向が見られる。

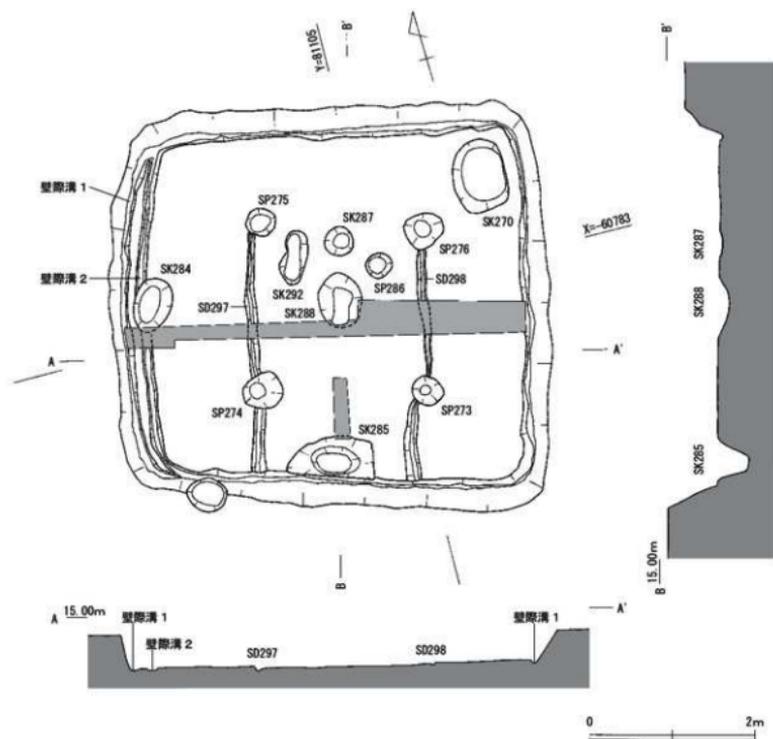
これまで述べてきた遺構は堅穴部内の貼り床が張られた面で検出したものであるが、貼り床を取り除いた状態では、壁際溝2と溝SD297・SD298を検出している（第25図）。

壁際溝2は堅穴部内西側で検出した。貼り床面で見られた壁際溝1から20cmほど内側（西側）に位置し、北端と南端は壁際溝1に連結している。この状況から、貼り床が敷かれた時に堅穴部内が西に拡張されたことが窺える。

SD297は南北方向に延びる深さ3～4cmの溝で主柱穴SP275・SP274に連結する形態をする。底面



第24図 S102 貼り床面遺物出土状況図、SK285断面図 (1:30)



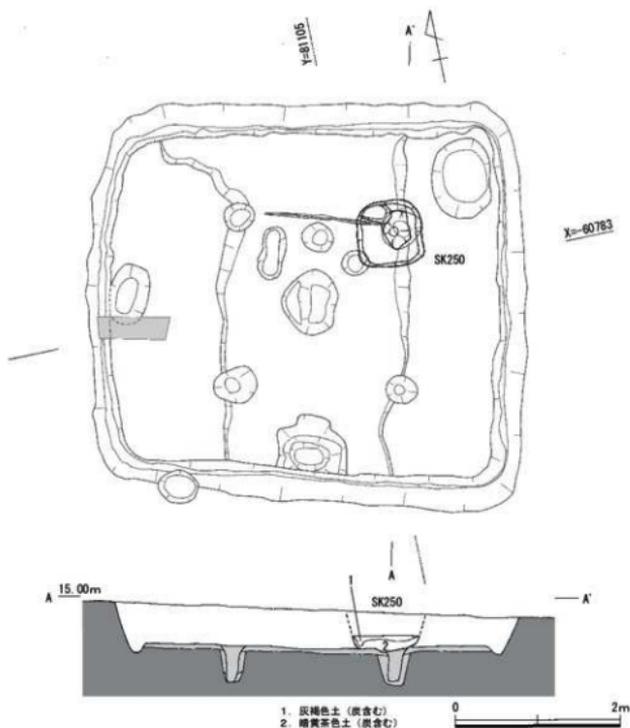
第25図 S102 貼り床除去後 平面図・断面図 (1:60)

のレベルは南へ若干下がることから、南側の壁際溝に排水する溝であったと思われる。また、溝を境にして西側の床面は2～3cm高く作られている。SD298はSD297と同形態を呈す。

これらSD297・SD298は貼り床面で見られた東と西の一段高い床の傾斜変換点の下で検出していることから、貼り床が張られる以前は一段高い床の際に溝が切られていたものと思われる。

このようにS102では堅穴部が新旧2段階存在することを確認したが、貼り床面で検出した主柱穴以外の、いわゆる貼り床が貼られる前段階の主柱穴が存在していないことから、上屋建物の建て替えといった大規模なものではなく、堅穴部内みの拡張・床面の変更が行われたものと現時点では解釈しておく。

これらの他、堅穴部内の埋土掘削中に土坑SK250を検出している(第26図)。平面形は隅丸方形を呈し、幅80cm、残存の深さ23cmを測る。土坑内からは土師器の甕片、高坏片が出土している。当初、SK250の位置がS102の北東側の主柱穴SP276の真上に位置することから、S102との関連を疑ったが、



第26図 SK250 平面図・断面図 (1:60)

出土した土器がS102床面出土の土器よりやや新しい傾向が見られたことから、上方から掘られたものと考えている。

S102の遺物は前述の土坑または床面から出土した土器の他、堅穴部の埋土から多数の土師器の壺片、甕片、高坏片や砥石1点、碧玉片1点、黒曜石製の剥片1点、水晶片1点が出土している。また、埋土から出土した土器の量はコンテナ4箱分と、本調査区で出土した半分近くを占めるほど多い。SK250の埋土からは土師器の壺片、高坏片が出土している。

S102、SK250の時期は出土遺物から古墳時代前期頃と思われる。

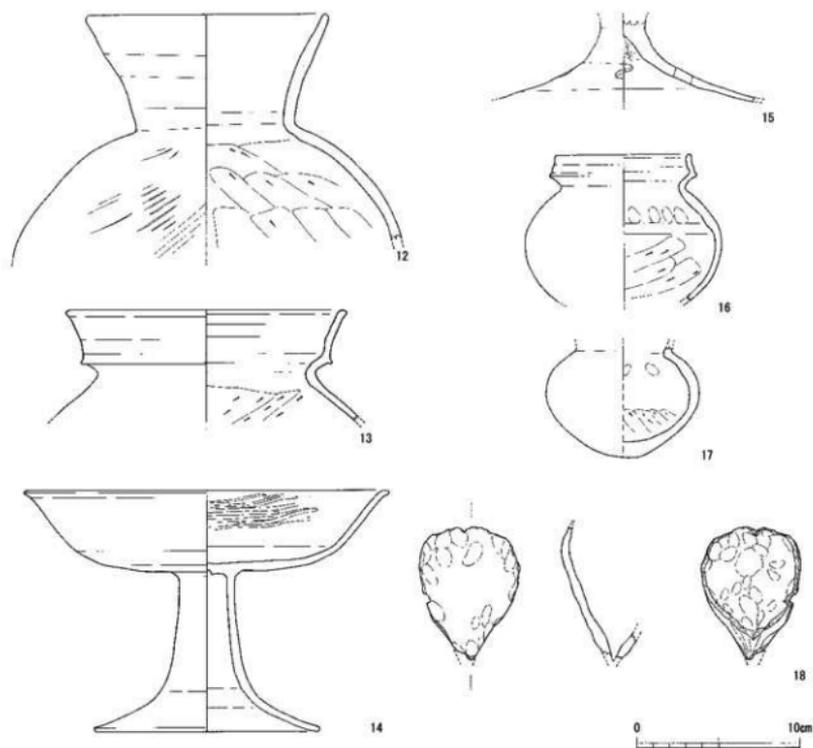
貼り床面出土遺物 (第27図、図版16)

12～18は堅穴内の床面から出土した土器である。

12はSK285の西隣で出土した土師器の壺で、口頸部は直口気味に外反し、端部は丸くおさめる。また、肩部は丸味を持って下りる形状を呈する。外面には直線文・波状文などは見られないが、斜め

第3章 調査の成果

方向の深く粗い刻み目が全面に見られる。これは工具などの痕跡と考えられる。内面は単位が大きいヘラ削り調整が見られる。13・14は南辺西側の壁際で出土した土器である。13は土師器の複合口縁の甕で、口縁部～肩部は強めの横ナデ調整で薄手でやや角張った形状を呈する。口縁端部は平坦面を持ち、下端突出部は下方に尖る。外面は無文だが内面にはヘラ削りが見られる。草田6期の特徴をもっている。14は土師器の高坏である。坏部口径21.7cm、器高14.8cmを測る大型のもので、薄手で丸味を帯びた精巧な作りである。坏部は最深部4.3cmを測り、緩やかな屈曲を経て外反する。端部は外方につまみ出すような形状を呈する。脚部は端部付近で大きく「ハ」字状に開く。端部はわずかに面を持つが先細る傾向にある。内外面ともに摩滅が顕著であるため、調整は不明瞭である。15は南西のコーナーで出土した土師器の高坏である。脚部は器高が低い裾広がり状のもので、内面には工具で調整を施した痕跡が残る。4方向に直径1.1cmの円形透かし孔が入る。16はSK285の西隣で出土した土師器の複合口縁の小型壺である。口縁部は短く内傾し、下端突出部は断面三角形状を呈する。底部



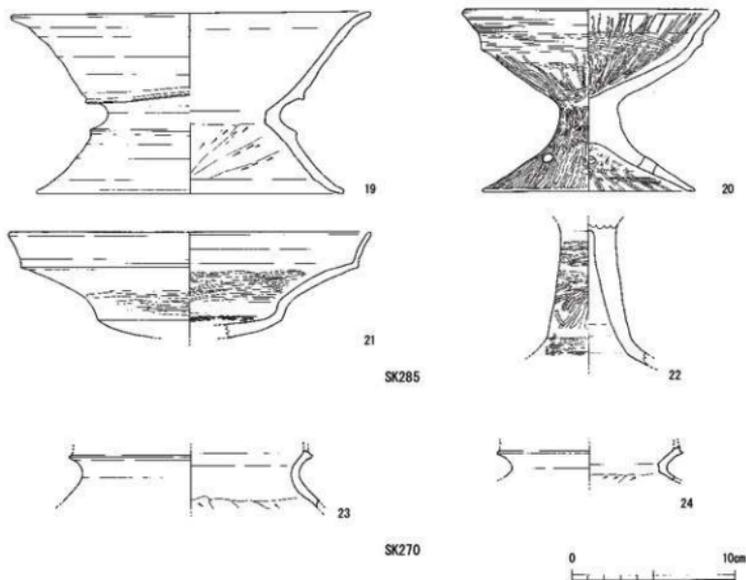
第27図 S102 貼り床面 出土遺物図 (1:3)

は丸底と思われる。外面は摩滅が顕著であるため調整は不明瞭だが、内面は肩部に指頭圧痕、胴部最大径以下に明瞭なヘラ削りの単位が見られる。17・18はSK285の東側で出土した土器である。17は土師器の小型壺で、口縁部が欠損しており、肩部～底部のみ残存している。形状は16に類似しており、16よりも一回りほど小型で器壁が厚手である。わずかに平底を持つが、自立しない程度のもと思われる。外面はナデ調整、内面は指頭圧痕とヘラ削りで調整している。18は手づくね土器である。欠損部が多く、どのような形をしていたものか機種・形態は分からない。内外面に指頭圧痕が多数見られ、残存する端部の断面を見ると土器を掴まんで窄められたような痕跡が見られる。タテチョウ遺跡で形が近似する土器が出土している。

SK285・SK270 出土遺物（第28図、図版17）

19～22はSK285から出土した土器である。

19は土師器の鼓形器台である。受部径が20 cmを超えるのに対し、器高は低く11.1 cmを測る。押し潰したような形状を呈し、筒部は短縮されている。外面は横ナデ、受部内面はヘラミガキで調整したと思われるが、摩滅のため不明瞭である。脚部内面はヘラ削りが見られる。また、外面の一部が黒色に変色している。草田6～7期に相当すると思われる。20・21・22は土師器の高坏である。これらは他の土師器に比べ胎土が極めて密で長石・石英などをほとんど含まない細かい粒子を基調と



第28図 S102内 SK285・SK270 出土遺物図 (1:3)

第3章 調査の成果

しており、器形も出雲地域では散見されないことから、搬入品である可能性が高いと思われる。20の坏部は最深部5.4cmを測る。外面には強い横ナデの痕跡が見られ、これによって複合口縁状の段が際立っている。端部は先端でわずかに内傾する。脚部は柱状部分を経て「ハ」字状に開き、端部に至るまで直線的に伸びる。3方向には直径0.9cmの円形透かし孔が入っている。調整は強い横ナデの後に横方向のハケ目を施し、その後、縦方向の細いヘラミガキで全面を仕上げている。山持遺跡I区⁽⁶⁾で近似する高坏が出土している。21は坏部である。復元口径22.0cmを測る大形のもので、器壁が薄く丁寧な作りである。坏部の底は明確な段を経て外反しながら大きく開き、端部付近では複合口縁状の段が作られている。端部は先細り丸く収める形状を呈する。調整は、横方向のヘラミガキが部分的に残り、坏底部内面には横方向のハケ目が円弧状に施される。当該地域の高坏としては特異な形態を呈するが、山持遺跡6区⁽⁷⁾で近似したものが出土している。22は脚部である。筒部はわずかに開きながら下り、明瞭な屈曲で端部へ開く形状を呈する。筒部には多方向の細いヘラミガキが見られ、端部付近の屈曲部分では縦・横方向のハケ目が施されている。

23・24はSK270から出土した土器である。

23・24は土師器の複合口縁の甕で、いずれも下端突出部～肩部にかけて残存しており、下端突出部は断面三角形形状を呈し水平に突出する。肩部内面はヘラ削りで調整されている。24は口縁部外面に煤の付着が見られる。

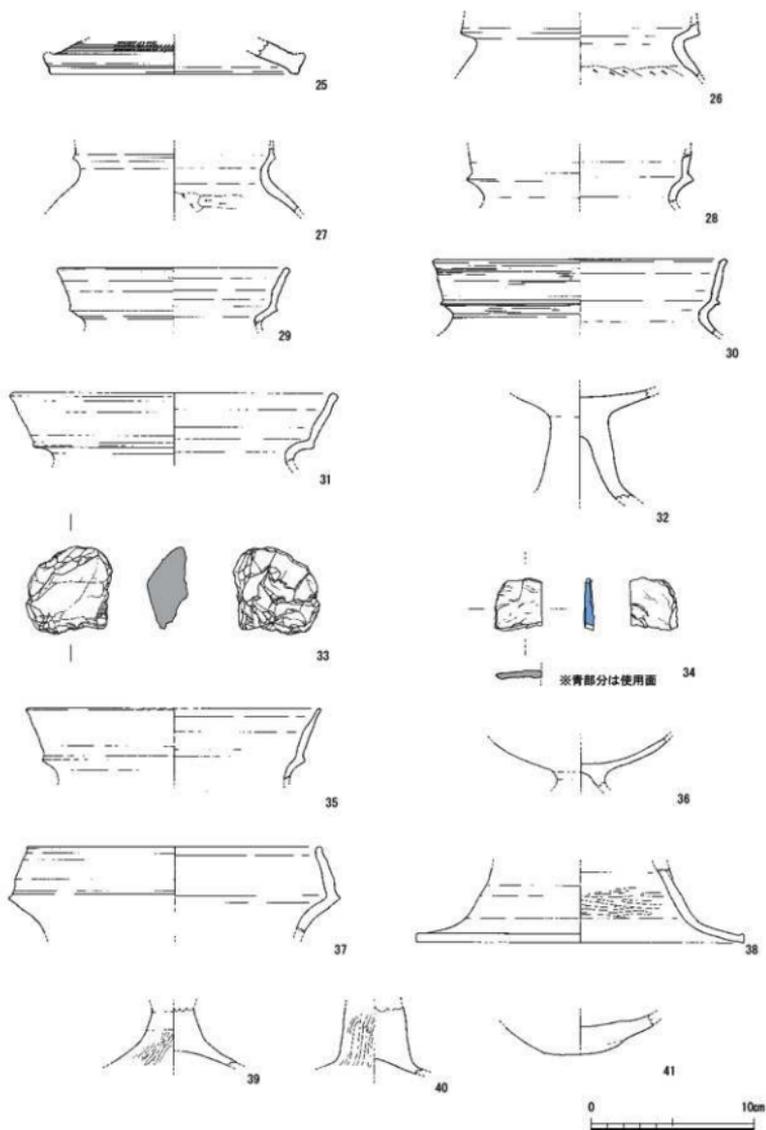
埋土層出土遺物（第29・30図、図版17・18）

25～42は堅穴部内の埋土から出土した遺物である。

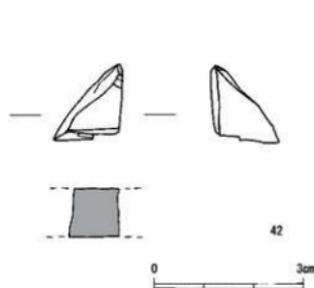
25～34は第1層の暗褐色土から出土した土器・石器で、25は弥生土器の高坏である。脚端部のみ残存しており、端部は厚くわずかな接地面を持つ。端部付近には4条の凹線文が廻り、凹線文の間3段に渡って、0.2cm間隔の刺突文が全周する。IV-2様式のものと思われる。26～30は土師器の複合口縁の甕である。26・27は下端突出部～肩部が残存しており、26は下端突出部が水平に張り出し、27は薄手で断面三角形形状を呈する。いずれも肩部外面は無文、内面にはヘラ削りが見られる。28は下端突出部のみ残存しており、顕著な断面三角形形状をしている。29・30は、いずれも口縁部が短く直線的に外傾する。30は外面に強い横ナデの痕跡が見られ、下端突出部をつまみ出したような形状を呈する。いずれも草田6～7期に相当すると思われる。31は土師器の複合口縁の甕である。口縁部のみ残存しており、目立った稜線は見られず直線的に外傾する。下端突出部は水平に張り出している。32は土師器の高坏である。脚部は厚手で、外面の調整などは摩滅しているため不明瞭である。33は珪岩製の叩き石とも思われるものである。明確な使用痕は見られず、石器ではない可能性もあるが、掲載しておく。34は頁岩製の砥石である。本来の形から剝離した破片と思われ、1面のみに平坦な使用面が確認できる。

35・36は第2層の黄茶色土から出土した土器である。

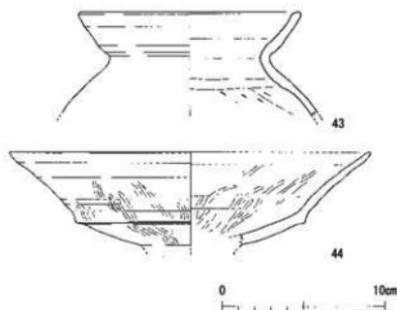
35は土師器の複合口縁の甕である。口縁部は薄手で全体的に外反しており、端部にかけてさらに先細る。草田5期のものと思われる。36は土師器の低脚坏である。坏底部～脚部上方が残存するもので、摩滅が激しく調整は不明である。



第29図 S102 埋土層出土遺物図1 (1:3)



第30図 S102 埋土層 出土遺物図2 (1:1)



第31図 SK250 出土遺物図 (1:3)

37～41は第3層の暗橙茶色土から出土した土器である。

37は土師器の複合口縁の壺である。口縁部は内傾し端部はわずかに外反する形状で、下端突出部は横に張り出す。草田6期あたりのもと思われる。38・39・40は土師器の高坏である。38は脚部の下方のみ残存したもので、端部付近で明確に折れ、端部は直線的な形状で外面に垂直面を持つ。復元底径20.0cmを測るやや大型のもと思われるが、壺の底部に接合される脚部である可能性も考えられる。調整は内面が横方向のヘラミガキで、外面は不明瞭ではあるがヘラミガキが施されていたと思われる。39・40は脚部片で、39は器高が低く裾広がりに「ハ」字状を呈し、40は柱状の上方を経て、端部に向かって明確に屈曲する。いずれも外面は縦方向のヘラミガキで仕上げられている。41は土師器の壺か甕の底部である。底部はやや平底で、外面に粘土を貼り付けている痕跡が確認できる。

42は第何層か不明な埋土内出土の碧玉の破片である。玉作りの素材と成り得るものであるが、小片であることから、詳細は不明である。

SK250 出土遺物 (第31図、図版18)

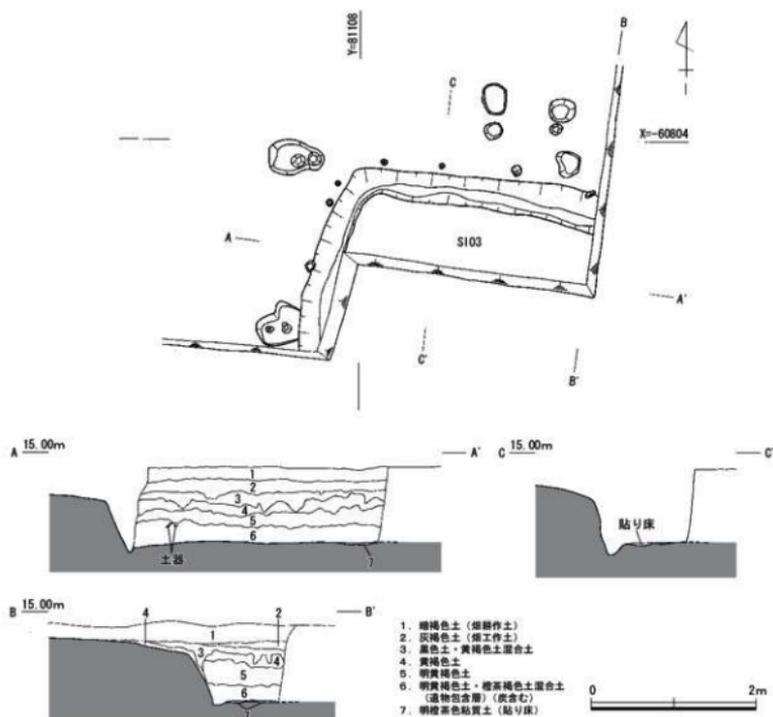
43は土師器の単純口縁の甕である。口縁部には複合口縁の名残を示すような稜がわずかに見られるが、緩やかな稜をなす程度のもので、頸部は「く」字状に屈曲する。口縁端部は平坦面を作る形状を呈する。また、口縁部外面に煤と思われる黒色の付着物が見られる。草田7期に相当するものと思われる。44は土師器の高坏である。坏部は複合口縁部の明確な段が付き、端部に向かって外反気味に開く形状を呈する。端部は薄手で先細る。下方外面に煤の付着が見られる。

竪穴建物跡 S103 (第7・32・33図、図版12・18)

調査区の南東隅、F5・F6・G5・G6グリッドに位置する竪穴建物跡である。

検出できたのは竪穴部の北と西側の一部だけであるが、工事立会調査によって建物跡が南側の調査区外に残存していることが分かっている(第1章 第3節を参照)。

堆積土はS103上で6層を数えるが、第1・2層は近現代の耕作土で第3～6層が遺物を包含する竪穴部の埋土となっている。

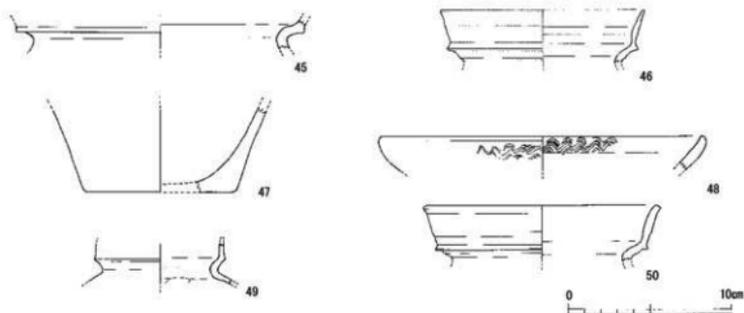


第32図 S103 平面図・断面図 (1:60)

堅穴部の平面形は先述の S102 同様、コーナーがやや丸みを帯びた正方形を呈する。建物跡の平面規模は残存した壁で東西 3.0 m、南北 2.5 m を測るが、工事立会調査で検出された S103 壁のプランから、東西 5.7 m 程の規模をもつと推測される。この法量が正しければ同形態の山陰地方の堅穴建物跡としては大型の部類に入ると思われる。堅穴壁は残りがよく、最も残りのよいところで、59 cm の高さ（深さ）が残存している。堅穴壁下部の際には深さ 7～14 cm の壁際溝が廻っており、床面は厚さ 1～3 cm の薄い明橙茶色粘質土の貼り床が張られている。

その他、地表部の堅穴壁沿いからは径 5～12 cm、深さ 3～10 cm の小型の穴を検出している。この小穴は S103 に沿う形で検出しており、当初は S103 に伴う遺構を想起させたが、埋土が調査区内堆積土第 1 層の近現代の畑耕作土に近似することから、畑使用時の杭などの痕跡と考えている。

なお、堅穴部内からは柱穴などの平面構造を示す遺構を検出することはできなかったが、調査区外の南側には S102 のような主柱穴などの遺構が存在していると思われる。



第33図 S103 出土遺物図 (1:3)

遺物は堅穴部内の床面から土師器の壺片や板状の石、下層の第5・6層からは土師器の壺・甕や高坏の細片が出土している。また、上層の第3～4層からは土器小片の他、弥生土器などS103外の周辺の遺構に関わる遺物も出土している。

S103の時期は出土遺物から古墳時代前期頃と思われる。

出土遺物 (第33図、図版18)

45は堅穴内の床面から出土した土師器の複合口縁の甕である。突出部は横方向に引き伸ばす形状を呈する。46～50は堅穴部の埋土層から出土した土器である。46・47は第4層の黄褐色土から出土した弥生土器で、46は複合口縁の甕である。口縁部は直立に近い立ち上がりで、端部にかけて薄く引き伸ばす形状を呈する。下端突出部は断面三角形形状を呈し水平に突出する。草田5～6期のものと思われる。47は壺か甕の底部である。底部は平底で、復元底径9.0cmを測る。外面の一部に煤の付着が見られる。48は上層から出土した土師器の壺である。口縁端部のみ残存したもので、復元口径19.6cmを測る。口縁部は内湾し、端部はごくわずかに内傾する。外内面両面に4条の波状文が施文されており、いずれも太く粗い線刻のもので、途切れがちの粗雑な施文である。外内面に波状文が施文される形態は珍しく、庄内から布留式の壺に類似するモチーフがあるとの指摘もうけている¹⁰⁰。また、出雲市の古志本郷遺跡¹⁰¹と山持遺跡IV区¹⁰²で近い形態の壺が出土しており、山持遺跡IV区では贖入品と分類されている。49・50は第6層の明黄褐色土・橙茶褐色土混合土から出土した土師器である。49は複合口縁の小型壺で直口壺になる可能性も考えられる。突出部はやや尖り、口縁部は直立気味に立ち上がる。草田7期に相当すると思われる。50は複合口縁の甕で、口縁部は短く肥厚し、端部に平坦面をもっている。外面の稜線が多いことから、横ナデを強めに施されたものと思われる。また、外面に煤の付着が見られる。草田7期に相当すると思われる。

掘立柱建物跡 SB05・SP176 (第7・34～36図、図版13・18)

調査区の中央の南東側、D4・D5・E4・E5グリッドで検出した掘立柱建物跡である。

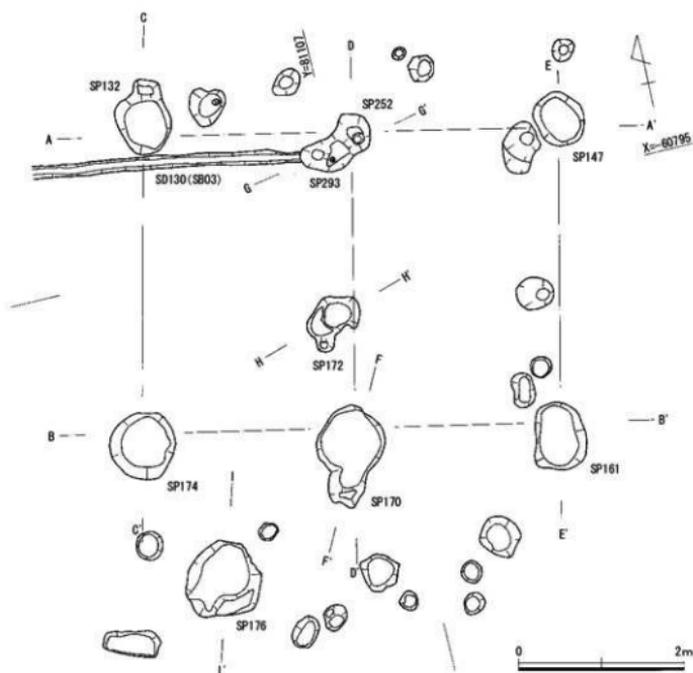
北西側の一部は弥生時代のSB03の南西端と切り合う形となっている。

平面構造は2間×1間で、平面規模は5.5～6.0 m×3.6～3.65 mを測る。平面形は東西に長い長方形形状を呈す。東西方向の長軸の1間分の距離はSP132-SP252間が2.6 m、SP252-SP147間が2.5 mを測るが、短軸の1間分の距離はSP132-SP174間が3.6 mと短軸が約1 m長い構造となっている。

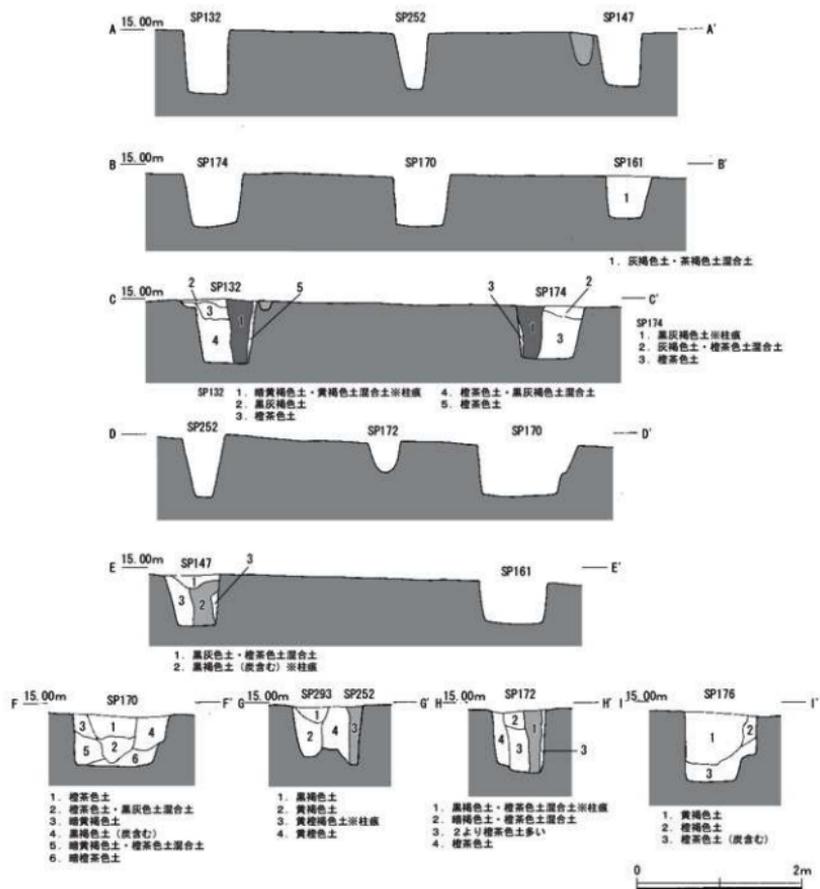
柱穴はSP132が径65 cm、深さ75 cm、SP174が径80 cm、深さ62 cm、SP170が径85 cm～100 cm、深さ63 cm、SP161が径60～80 cm、深さ50 cm、SP147が径65 cm、深さ68 cm、SP252が径40～55 cm、深さ70 cmを測る。柱穴は径、深さ共に本遺跡内の他の柱穴に比べ大きく深いものであり、一見すると土坑のように見えるが、SP174・SP132・SP147・SP252では柱の痕跡を検出している。なお、SB05の南西側の近接する場所からも本建物跡の柱穴と近似する柱穴SP176を検出している。

遺物はSP174の柱痕跡の土層から土師器の甕片、SP132から土師器の甕片、SP147・SP170・SP252から土器の細片が出土している。

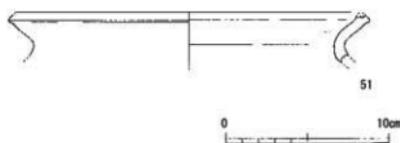
SB05の時期は出土遺物から古墳時代前期頃と思われる。



第34図 SB05・SP176 平面図 (1:60)



第35図 SB05・SP176 断面図 (1:60)



第36図 SB05 出土遺物図 (1:3)

第3章 調査の成果

出土遺物 (第36図、図版18)

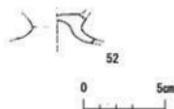
51はSP174から出土した土師器の単純口縁の甕である。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は断面三角形形状を呈する。草田7期頃のものと思われる。

掘立柱建物跡 SB06 (第7・37・38図、図版13・18)

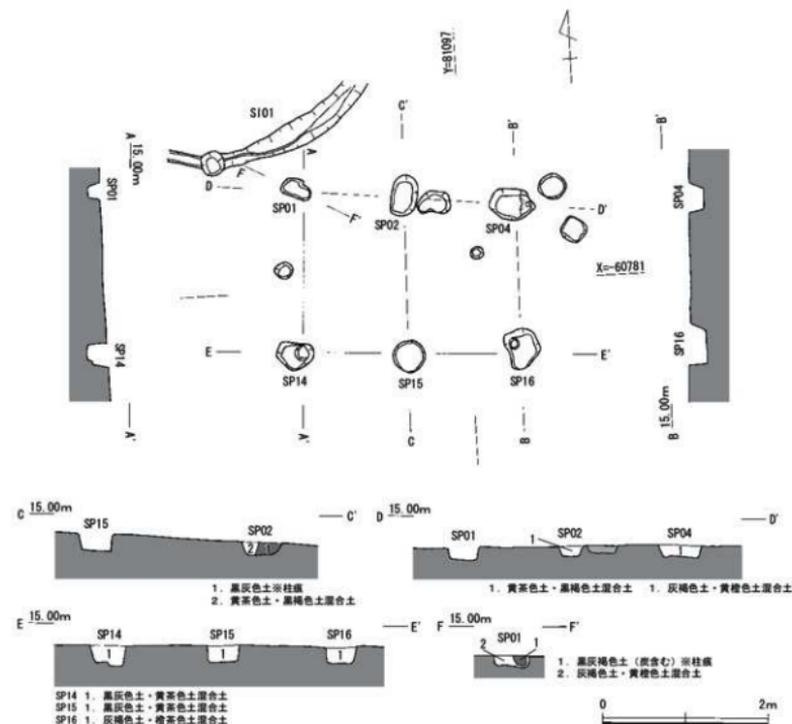
調査区中央の西側、C3・C4・D3・D4グリッドで検出した掘立柱建物跡である。

平面構造は2間×1間で、平面規模は3.6～3.65m×2.1mを測る。平面形は南北に長い長方形状を呈す。柱穴間の距離は南北方向の長軸が1.8m、東西方向の短軸が2.1mと短軸がやや長い構造となっている。

柱穴については径が50～60cm、深さが50～70cmで、本遺跡の柱穴の中では比較的深い部類に入る。また、SP87・SP242・SP232では柱の痕跡を検出している。



第38図 SP88 出土遺物図 (1:3)



第39図 SB07 平面図・断面図 (1:60)

遺物はSP87・SP290から土師器の小片が出土している。なお、本建物跡に類するものではないが、SP87の南西側に近接するSP88からは土師器の低脚坏が出土している。

SB06の時期は出土遺物から古墳時代前期頃と思われる。

出土遺物（第38図、図版18）

52はSP88から出土した土師器の低脚坏である。坏底部～脚部の残存で、脚部は強く外反しながら端部に向かう形状を呈している。草田7期に相当すると思われる。

掘立柱建物跡 SB07（第7・39・40図、図版13・14・18）

調査区の北西、A2・A3・B2・B3グリッドで検出した掘立柱建物跡である。

北西側には弥生時代のSI01が近接している。

平面構造は2間×1間で、平面規模は2.6m×1.75～1.95mを測る。平面形は東西に長い長方形を呈し、短軸はSP01～SP14間が1.95m、SP04～SP16間が1.75mと東端より西端が長い構造となっている。

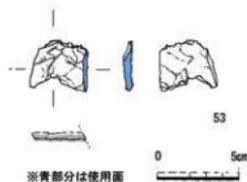
柱穴は径が20～40cmと本遺跡内では小さい部類で、深さは10～20cmと浅い。前述の近接するSI01も後世の削平を受けていたことから、SB07の遺構面も本来はもう少し高いレベルにあったと考えられる。

遺物はSP15・SP16から土師器の甕片、SP14から土器の小片、SP02からは砥石が1点出土している。なお、土器については小片のため、図化はしていない。

SB07の時期は出土遺物と本調査の出土土器の下限から、古墳時代前期頃と推測される。

出土遺物（第40図、図版18）

53はSP02から出土した安山岩製の砥石である。1面に平滑な面があり、研がれた痕跡が見られる。本来はもっと厚みがあったものが剥離したと見られる。



第40図 SB07出土遺物（1：3）

柱穴列 SA01（第7・41・42図、図版14・18）

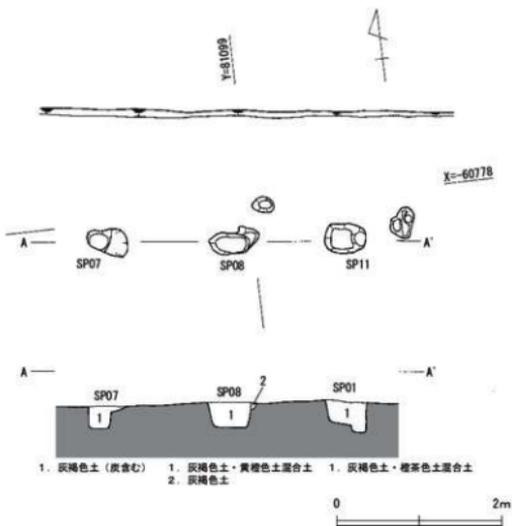
調査区の北西、A3・A4グリッドで検出した柱穴列である。

南西側にSB07、東側に弥生時代のSB01が近接している。

3穴の柱穴が東西方向に並ぶ形で検出したもので、SP07～SP08間は1.6m、SP08～SP11間は1.4mを測る。

柱穴は径が20～50cm、深さは26～35cmを測り、埋土はSP08・SP11が同一でSP07もこれらと近似している。また、SP11は底面の形状が2段となることから、柱が建て替えられたものと思われる。調査区外の北側に対となる柱穴列が存在すれば、2間×1間以上の掘立柱建物跡となる可能性も考えられるが、現時点では明確にできないことから、柱穴列として報告しておく。

遺物はSP07から土師器の甕片、SP11からは土器の細片が出土している。



第41図 SA01 平面図・断面図 (1:60)



第42図 SA01 出土遺物図 (1:3)

SA01 の時期は出土遺物から古墳時代前期頃と思われる。

出土遺物 (第42図、図版18)

54はSP07から出土した土師器の壺である。口縁部は全体的に肥厚しており、端部は丸みを帯びてやや先細る。下端突出部は小さく断面三角形状を呈している。草田7期に相当すると思われる。

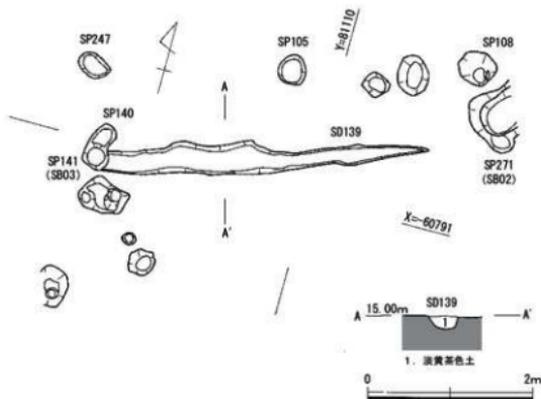
溝SD139 (第7・43図、図版14)

調査区中央の東側、D5・D6グリッドで検出した溝である。

西側はSB03、北東側はSB02と近接し、南西端はSB03の柱穴SP141と重なっている。

溝は東西方向に延びており、軸はやや北へ振れる形をとる。長さは4.2m、幅は最大40cm、深さは3～15cmを測り、北東側に向かうに連れ、幅は狭く深さは浅くなる形状を呈す。埋土は淡黄茶色土の単層である。

当初はSB02やSB03のような布掘りの建物跡とも考えられたが、これに対応する溝・柱穴が見当た



第43図 SD139・SP105 平面図・断面図 (1:60)

らないことから、単独の溝としてあげておく。用途など遺構の性格については分からない。

遺物は埋土内から土師器の甕の小片が出土している。

SD139の時期は本調査の出土土器の下限から、古墳時代前期頃と推測される。

柱穴 SP105 (第7・43・44図、図版14・18)

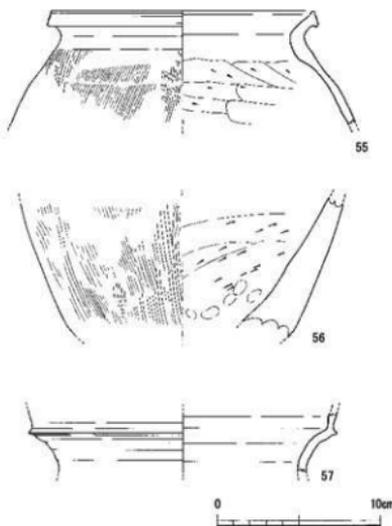
調査区の中央の東、C5グリッドで検出した。周辺には近接してSB02・SB03・SD139が存在している。径は35cmのほぼ円形を呈し、深さは41cmを測る。埋土は灰褐色土・橙茶色土混合土の単層である。

これと対になるような配列をもつ柱穴が他に確認できなかったことから、現時点では単独の柱穴としてあげておく。

柱穴内埋土からは弥生土器の甕片、壺か甕の底部、土師器の壺片と2～4cm大の焼けた粘土塊が5点(55g)出土している。なお、この焼けた粘土の塊は後述するSP72・SP108・SP247からも出土している。

出土遺物(第44図、図版18)

55～57はSP105から出土した土器である。55は弥生土器の甕で、口縁端部の拡



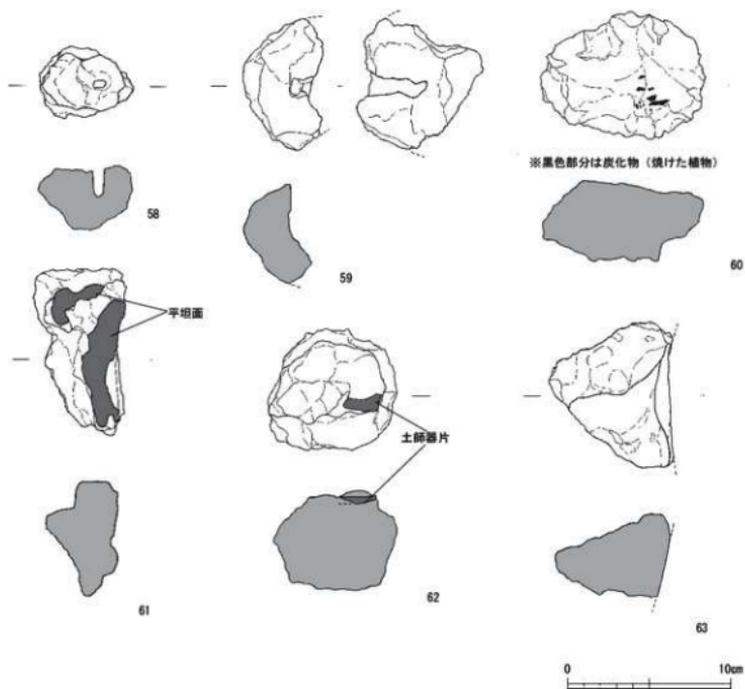
第44図 SP105 出土遺物図 (1:3)

第3章 調査の成果

張は狭く、口縁部外面に2条の凹線文を施す。頭部にかけて肥厚するが、肩部以下はヘラ削りで薄くなっている。肩部外面には縦方向のハケ目が見られる。口縁部付近の様相はIV-2様式だが、内面のヘラ削りの位置などを考えるとV-1様式あたりのものとも思われる。56は弥生土器の壺か甕の底部である。底部付近の厚みは最大で2.5cmを測り、大型製品であったことを窺わせる。外面は縦方向のハケ目が隙間なく施文され、内面はヘラ削り、底部付近は指頭圧痕で調整している。また、外内面ともに黒色の範囲が見られ、内面は煤の付着が見られる。胎土から見ると弥生時代中期～後期のものと思われる。57は土師器の複合口縁の壺である。下端突出部～頭部にかけて残存しており、突出部は断面三角形形状を呈している。草田7期に相当すると思われる。

柱穴 SP72・SP108・SP247 (第7・14・15・17・43・45図、図版3・4・19)

SP72は調査区北東のB6グリッド、SP108は同じく調査区北東のC6グリッド、SP247は調査区中央東寄りのD5グリッドで検出した柱穴である。SP72・SP108は先述のSB02内に、SB247はSB03内にそ



第45図 SP72・SP108出土 焼粘土塊図 (1:3)

それぞれ位置しているが土師器片が出土していることから、SB02・SB03には伴わないと考えられる。それぞれの法量はSP72が径45～60cm、深さ33cm、SP108が径40～48cm、深さ43cm、SP247が径25～40cm、深さ29cmを測る。いずれの柱穴も対となる柱穴が確認できないことから、現時点では単独の柱穴としておく。

これら柱穴の埋土からは焼けた粘土の塊が出土している。

SP72の埋土からは4～9cm大の焼粘土塊が11点(1,610g)出土しており、このうち、穿孔があるもの2点、焼けた植物(茅?)が付着するもの1点、平坦な面が作られているもの1点が確認されている。

SP108の埋土からは5～9cm大の焼粘土塊が10点(1,373g)出土しており、SP72のものと同様な平坦な面が作られているもの1点と土師器を挟んだもの1点が見つかっている。

SP247の埋土からは5cm大の焼粘土塊が1点(114g)出土している。

出土遺物(第45図、図版19)

58～61はSP72の埋土から出土した焼けた粘土の塊である。58・59は貫通しない穴が見られ、枝もしくは茅などを差し込んだものと思われる。58の穴は方形気味な楕円形を呈し、長軸0.8cm、短軸0.5cm、深さ1.6cmを測る。59の穴も方形気味な楕円形を呈し、長軸1.0cm、短軸0.5cm、深さ3.6cmを測っている。60は茅と見られる焼けた植物が付着したものである。61は1面に平坦な面が見られるもので、平らな何かに密着していた痕跡なのかもしれない。

62～63はSP108の埋土から出土した焼けた粘土の塊である。62は土師器片が挟まっているもので、粘土塊が作られた際に入り込んだものと思われる。63は61と同様、1面に平坦面が見られるものである。

注

- (1) 松本岩雄 1992『出雲・隠岐地域』『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』
- (2) 平井 勝 1991『弥生時代の石器』
- (3) 鹿島町教育委員会 1992『南講武草田遺跡』
- (4) 文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査のびきー集落遺跡発掘編一』
- (5) 島根県教育委員会 1990『タテテウ遺跡発掘調査報告書』
- (6) 島根県教育委員会 2005『山持遺跡 (vol.1)』
- (7) 島根県教育委員会 2011『山持遺跡Vol.7 (6区)』
- (8) 松江市教育委員会の赤澤秀則氏から教示して頂いた。
- (9) 島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡VI-K区の調査一』
- (10) 島根県教育委員会 2007『山持遺跡vol.3 (IV区)』

第3章 調査の成果

参考文献

- 松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌 第8集』
- 松山智弘 2000 「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌 第17集』
- 出雲市教育委員会 2001 『下古志遺跡』
- 出雲市教育委員会 2006 『門前遺跡発掘調査報告書』
- 湖陵町教育委員会 1987 『庭反Ⅱ遺跡・他』
- 島根県教育委員会 1997 『洪山池遺跡・原ノ前遺跡』
- 島根県教育委員会 1997 『福富Ⅰ遺跡 屋形Ⅰ号墳』
- 島根県教育委員会 1998 『塩津丘陵遺跡群』
- 島根県教育委員会 2001 『上野Ⅱ遺跡』
- 島根県教育委員会 2002 『田中谷遺跡 塚山古墳 下がり松遺跡 角谷遺跡』
- 島根県教育委員会 2007 『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区 (vol.2)』
- 島根県教育委員会 2010 『道休加遺跡』
- 島根県教育委員会 2011 『苅捨古墳 西川津遺跡』
- 島根県教育委員会 2011 『堂ノ上遺跡』
- 島根県教育庁埋蔵文化財センター 2011. 4 『下古志遺跡の発掘調査について』現地説明会資料
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1998 『袋尻遺跡群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2004 『石田遺跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2005 『田和山遺跡』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2006 『洪ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』

2. 弥生時代後期後半頃（第47図）

布掘り掘立柱建物跡SB02・SB03・SB04がこの時期に相当すると考えるが、実際、土器の時期に準じた時期決定ができた遺構はSB04だけであり、SB02・SB03はSB04との形態の類似性から当該期に属すると判断している（SB02・SB03の時期を正確に言えば、本遺跡出土土器の上限：弥生中期末～下限：古墳時代前期）。時期を推定する根拠として乏しい感否めないが、後述する県内で検出された布掘り建物跡が草田1～5期段階に多く散見されることから、少なくとも弥生時代後期の建物跡であったことは違いないと考える。

本遺跡の当該期の遺構においては布掘り掘立柱建物跡のみ確認されているが、この建物跡は通常の掘立柱建物跡とは違い、桁行に溝が掘られた特異な形態を擁している。少しこの建物について触れておく。

県内でこれまで見つかった布掘り掘立柱建物跡もしくはその可能性があるものは、田中谷遺跡（松江市法吉町）、南講武草田遺跡（松江市鹿島町）、洪山池遺跡（松江市東出雲町）、上野II遺跡（松江市穴道町）、柳遺跡（安来市）、竹ヶ崎遺跡（安来市）、門前遺跡（出雲市）、下古志遺跡A区・B区（出雲市）、下古志遺跡1区（出雲市）、山持遺跡6区⑥（出雲市）、庭反II遺跡（出雲市湖陵町）、堂ノ上遺跡（益田市）の12遺跡、24例で（表1参照）、その大半は弥生時代後期の範疇に入るものである。県外では鳥取県で数例が確認されているほか、石川県で多く類似が見られる。県内の状況に立ち戻ると、これまで当該期の掘立柱建物跡が数多く検出されている中、24例で留まっているこの布

表1 島根県内で確認された布掘り掘立柱建物跡

遺跡名	所在地	遺跡名	長軸	短軸	面積	時期
1 後廻遺跡	松江市上乃木	SB02	6.2m	3.7m	22.94㎡	IV-2様式～草田7期
		SB02：建物	桁行 5.6m	梁間 3.7m	20.72㎡	
2 後廻遺跡	松江市上乃木	SB03	4.2m	4.0m	16.80㎡	IV-2様式～草田7期
		SB03：建物	桁行 4.0m	梁間 4.0m	16.00㎡	
3 後廻遺跡	松江市上乃木	SB04	4.0m	4.0m	16.00㎡	草田3期
4 田中谷遺跡	松江市法吉町	SB15	4.9m	2.6m	12.74㎡	草田2期
5 田中谷遺跡	松江市法吉町	SB19	4.6m	2.6m	11.96㎡	草田2期以降
6 田中谷遺跡	松江市法吉町	SB24	3.9m	3.6m	14.04㎡	不明
7 南講武草田遺跡	松江市鹿島町	SB06・07	2.9m	1.5m	4.35㎡	草田7期
8 南講武草田遺跡	松江市鹿島町	SB05・08	1.9m	1.6m	3.04㎡	草田3期
9 洪山池遺跡	松江市東出雲町	SB02	5.4m以上	5.2m	28.08㎡	草田5期？
10 上野II遺跡	松江市穴道町	SB03・05	3.5m	2.3m	8.05㎡	不明
11 柳遺跡	安来市	SB01	4.7m	4.7m	26.79㎡	草田5期？
12 柳遺跡	安来市	SB02	5.5m	4.7m	25.85㎡	草田5期？
13 竹ヶ崎遺跡	安来市	SB07	2.6m	—	—	不明
14 門前遺跡	出雲市	SB01・03	4.5m	2.3m	10.35㎡	草田4期以降？
15 下古志遺跡A区	出雲市	BSB03	4.5m	2.6m	11.70㎡	草田1期
16 下古志遺跡B区	出雲市	BSB03	2.7m	2.4m	6.48㎡	草田1期
17 下古志遺跡B区	出雲市	BSB04	4.5m以上	2.1m	9.45㎡以上	草田1～2期
18 下古志遺跡B区	出雲市	BSB05	4.4m以上	2.5m	11.0㎡以上	草田1期
19 下古志遺跡B区	出雲市	BSB06	4.6m	2.4m	11.04㎡	草田1期
20 下古志遺跡B区	出雲市	BSB08	3.2m	—	—	不明
21 下古志遺跡1区	出雲市	SB103	4.4m	4.3m	18.92㎡	弥生後期後半？
22 下古志遺跡1区	出雲市	SB106	5.1m	2.3m	11.73㎡	弥生後期後半？
23 山持遺跡6区⑥	出雲市	SB01	5.2m	2.5m	13.00㎡	草田5期
24 山持遺跡6区⑥	出雲市	SB02	7.9m	3.0m	23.70㎡	草田5期～
25 山持遺跡6区⑥	出雲市	SB05	4.1m	2.3m	9.43㎡	草田5期～
26 庭反II遺跡	出雲市湖陵町	遺構XVII	2.8～3.0m	1.7～1.9m	4.76～5.7㎡	草田3期？
27 堂ノ上遺跡	益田市	SB08	5.6m	4.6m	25.76㎡	弥生後期後葉以降

※規模は柱痕や柱穴が分からないものが多いことから、長軸・短軸を示した。

また、面積は布掘り溝より内側を測ったことから、実際の建物の床面積を示さない。

掘り掘立柱建物跡が希少なものであることは間違いなく、遺構の用途においても通常の掘立柱建物とは相違する、特別な性格を有したものであったとも考えられる。

後廻遺跡では丘陵の頂部と北側へ下がる緩斜面上で合わせて3棟の布掘り掘立柱建物で作られている。前述のとおり、布掘り掘立柱建物が特別な性格を有した建物であったと解釈できるならば、3棟も密集する当該期の本遺跡地は、集落の中で特別な場所であったと推測できる。それは通常、集落では見つかるであろう一般的な掘立柱建物跡や堅穴建物跡がこれを避けるように見られないことも空間分けが行われたことを示す一つの要因と成り得よう。なお、布掘り掘立柱建物は3棟が同時に存在していたのではなく、少なくともSB02とSB03には時間的な前後があったと考えられる。これは両者が立地する平面距離間が2m程しかなく、建物が接近しすぎていることからの推測であるが、上屋の屋根が平面の遺構以上に外へ張り出すことを想像すると、接近度はますます高くなる。このような状況からSB02とSB03には新旧関係があると推測するが、どちらが先行したものかは定かでない。

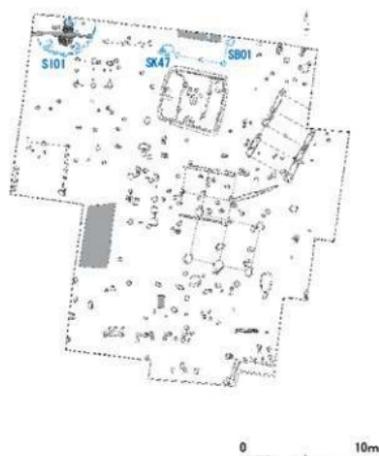
以上のことから当該期の本遺跡は、集落内で特別な性格を有した布掘り掘立柱建物が丘陵頂部付近を選んで建てられていた状況が窺え、またそれは当該期の時期内で位置を若干変えた場所に建て替わが成され、人々が普段の生活を営んでいた場所は布掘り掘立柱建物が作られた丘陵頂部を避けた本調査地外に存在しているものと考えられる。

3. 古墳時代前期頃（第48図）

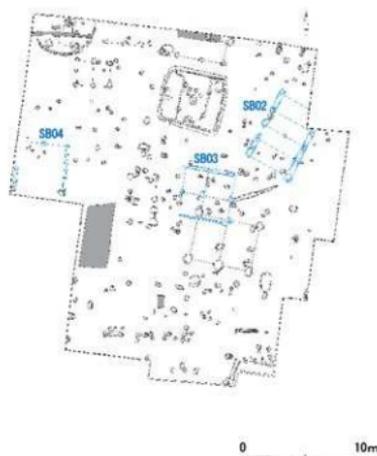
堅穴建物跡 S102・S103、掘立柱建物跡 SB05・SB06・SB07、柱穴列 SA01、溝 SD139 がこの時期に相当する。また、単独の柱穴の大半もこの時期の範疇に入ると考えられる。これらは本遺跡で見つかった最終期の遺構であり、調査区北から南にわたって存在している。

堅穴建物跡 S102 は床面積約 46 m²を測る山陰の当該期の堅穴建物跡としては大型の部類に入るものである。S103 も全体像は把握できないものの、工事立会調査から推定されるその規模は S102 を凌ぐ大型の堅穴建物跡であったことが分かっている。両者の平面形はやや隅が丸みを帯びる方を呈し、隅丸方形から方形へと移り変わる過渡期の堅穴建物跡と考えられる。⁽¹⁶⁾ この稀に見る大型堅穴建物跡である S102 内からは土坑・溝など用途がはっきりしないものが検出している。この土坑について若干述べておく。

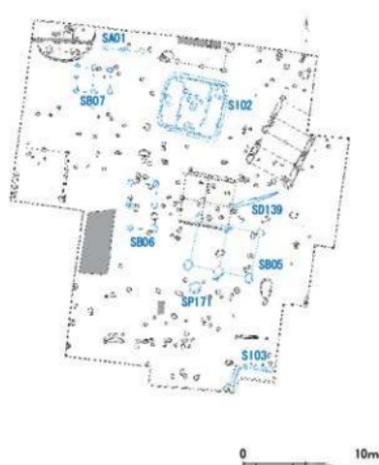
堅穴内に作られた土坑のうち、俗に中央ビットと称される SK288 は堅穴建物跡において普遍的に見られる土坑で、SK292・SK287 も合わせて本遺構では火の使用に関する土坑と解釈されるが、他の SK270・SK284・SK285 はやや特殊な土坑と考えられる。SK285 は南端の壁際中央に作られた壁際ビットとも称されるもので、その周囲の床面には砂利が敷かれる特異な土坑である。当該期の堅穴建物跡内に砂利が敷かれた例は少なく、県内ではこれまで、勝負遺跡（松江市東出雲町）の S103・S107⁽¹⁷⁾ の1遺跡 2例しか確認されていない。隣県の岡山県においては津寺遺跡の堅穴住居 37⁽¹⁸⁾、伊福定国前遺跡の堅穴住居 19⁽¹⁹⁾ などが知られるが希少な事例であることは間違いがない。このうち、勝負遺跡の S103 と津寺遺跡の堅穴住居 37 は壁際ビットに隣接して砂利が敷かれており⁽²⁰⁾、本遺跡の S102 とほぼ同様な状況が窺えるがその用途、性格は明らかにされていない。なお、勝負遺跡の S107 は堅穴内で玉作りが行われ



第46図 彌生時代中期末・後期初頭頃(1:400)



第47図 彌生時代後期後半頃(1:400)



第48図 古墳時代前期頃(1:400)

ていたことが分かっている。SK270については田和山遺跡群A遺跡(松江市乃白町)のS114や大角山遺跡(松江市乃木福富町)のS101などで近似する工作用ビットとも呼ばれる楕円形の土坑が確認されている。両者は玉作りが行われた工房跡であり、碧玉の剥片など多数の玉作り素材が見つかっている。

このように見ていくと、本遺跡のS102内の特殊な土坑また砂利敷きは、玉作工房跡に近似する要素をもっていることが分かるが、これを決定し得る玉作り関連遺物がS102では埋土中の碧玉片1点だけで、玉作工房跡と結論付けるには考古学的物証があまりにも少ないものである。

これらのことからS102は基本的には住居と解釈するが、玉作りには限定しない何らかの製作工房であった可能性も合わせて考えておきたい。

その他、特筆するものとして柱穴の埋土内から出土した焼けた粘土の塊をあげておく(第45図・図版19)。

この焼粘土塊は総数22点、総重量は3,097gを測り、土師器を挟むもの・穿孔があるもの・焼け

た植物（茅？）が付着するもの・平坦な面が作られているものなどが確認されている。このような焼粘土塊について言及した発掘調査報告は管見ではこれまでほとんどなく、正体不明の焼土塊として片付けられているものが多い中、福岡県小郡市の一口遺跡で近似するものが出土している⁽²⁴⁾。この一口遺跡で出土した焼土塊からはササが付着しているものや、平坦な面が作られているものが見られ、その特徴は本遺跡出土の焼粘土塊と酷似している⁽²⁵⁾。また、一口遺跡出土の焼土塊に関して柏原孝俊はこれを土器焼成に関わる被覆材料としての粘土と考え、粘土を用いた覆い焼きを指摘している⁽²⁶⁾。また、安達和隆は粘土を使用した覆い焼きによる土器焼成の実験を行い、焼成後の壁体が一口遺跡出土焼土塊の実測図と写真に酷似することを指摘している⁽²⁷⁾。以上の事例から、本遺跡で出土した焼粘土塊は土師器の土器焼成に伴う粘土を用いた被覆部、いわゆる壁体の残骸であったと考えておきたい。

この他、当該期にあたるSB05・SB06・SB07は弥生時代のもと同様、高床式の倉庫と思われるが、SB05においては柱穴が大きく、遺構の規模も大型であることから、通常の倉庫とは性格が異なる建物であったとも考えられる。また、SA01は建物跡の一部であった可能性も想定しておく必要がある。

当該期の後廻遺跡は弥生時代後期後半頃の布掘り掘立柱建物で占められた様相から一変し、住居である堅穴建物と倉庫と見られる掘立柱建物が作られている。このようにこの時期の本遺跡は遺跡の全エリアを集落の生活スペースとして使用していることが分かるが、丘陵頂部付近は住居ではなく、倉庫と見られる掘立柱建物が配置された状況が窺える。なお、前述のとおりSB05が特異な建物であると想定できるならば、丘陵頂部付近は弥生時代後期後半頃から当該期まで一定の特別な空間として踏襲されていた可能性も考えておかなければならない。

第2節 まとめ

後廻遺跡周辺の遺跡においては、これまで同一丘陵の東側に方墳の経塚古墳⁽²⁸⁾、北方の別の丘陵に石斧などが出土した宇賀Ⅰ遺跡⁽²⁹⁾、北方の低地に同じく石斧が出土した宇賀Ⅱ遺跡⁽³⁰⁾が存在するのみの遺跡が希薄なところであったが、本調査によって弥生時代中期末～古墳時代前期までの集落の存在を明らかにすることができた。また、調査区内では弥生時代中期末・後期初頭頃には北側、弥生時代後期後半頃には丘陵中央、古墳時代前期頃は丘陵全体と、丘陵の空間使用が時期ごとに変化している様相を窺い知ることができた。このような本調査成果から、東西に延びる本丘陵には少なくとも弥生時代中期末・後期初頭～古墳時代前期までは、このような集落が広がっていたものと思われ、丘陵に生活の場を求めた集落像が想起される。

以上のように今回の調査は、一部ではあったが松江地域の弥生時代中期末・後期初頭～古墳時代前期の集落の様相を知ることができた有意義なものであった。なかでも、堅穴内に稀有な遺構を併せもつ堅穴建物跡SI02と県内では希少な布掘り構造をもつ掘立柱建物跡SB02・SB03・SB04を検出できたことは今後、松江地域あるいは山陰地方の弥生時代と古墳時代の建物を明らかにしていく上で大変貴重な成果と成り得よう。

発掘調査の最大の成果はこのような新たな地域の歴史を解明することである。今後も事業者や関係者の理解のもと地道な発掘調査が行われ、地域の歴史が明らかにされていくことに期待したい。

第4章 総括

註

- (1) 第3章調査成果で記述した時期も同様に解釈して頂きたい。なお、堅穴建物跡 S101 は床面出土の土器から時期決定をしている。
- (2) 浅川滋男編 1998『先史日本の住居とその周辺』
島根県教育委員会 2010『道休畑遺跡』
上記報告では掘立柱建物跡の梁間1間のは高床式倉庫と考えられており、本稿もこれに準拠した。
- (3) 島根県教育委員会 2002『第4章 田中谷遺跡』『田中谷遺跡 塚山古墳 下がり松遺跡 角谷遺跡』
- (4) 鹿島町教育委員会 1992『南講武草田遺跡』
- (5) 島根県教育委員会 1997『渋山池遺跡』『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』
- (6) 島根県教育委員会 2001『上野Ⅱ遺跡』
- (7) 島根県教育委員会 1998『柳遺跡』『塩津丘陵遺跡群』
- (8) 島根県教育委員会 1998『竹ヶ崎遺跡』『塩津丘陵遺跡群』
- (9) 出雲市教育委員会 2006『門前遺跡発掘調査報告書』
- (10) 出雲市教育委員会 2001『下古志遺跡』
- (11) 島根県教育庁埋蔵文化財センター 2011. 4『下古志遺跡の発掘調査について』現地説明会資料
- (12) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの東山信治氏に教示して頂いた。
- (13) 湖陵町教育委員会 1987『庭反Ⅱ遺跡・他』
- (14) 島根県教育委員会 2011『堂ノ上遺跡』
- (15) 東山信治氏に県内で確認された布掘り建物の一覧表の資料を頂いた。本稿はこれに一部加えたものを記している(表1も同様)。
- (16) 鳥取県教育委員会 1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
上記報告書では山陰の堅穴建物跡の平面形が円形から隅丸方形、次いで方形へと変化することが指摘されている。
- (17) 島根県教育委員会 1998『勝負遺跡・堂床古墳』
- (18) 岡山県教育委員会 1996『津寺遺跡3』
- (19) 岡山県教育委員会 2005『伊福定国前遺跡2』
- (20) 米田克彦 島根考古学会 2011『玉作工房の施設とその機能—中国地方を中心に—』『島根考古学会誌 第28集』
- (21) (20) と同。
- (22) 松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告2 A・B遺跡』
- (23) 島根県教育委員会 1988『島根県消防学校建設に伴う発掘調査報告書』
- (24) 安達和隆 島根県古代文化センター 2001『土器野焼き実験レポート—覆い式野焼きにおける黒斑と壁体破片生成の過程—』『古代文化研究 第9号』
上記報告に掲載されている一の口遺跡出土焼土塊の実測図による。
- (25) (24) と同。

- (26) 柏原孝俊 1998「弥生時代前期の土器づくり ―一ノ口遺跡出土の焼土塊をめぐる―」『古代文化 11号』
- (27) 安達和隆 島根県古代文化センター 2001「土器野焼き実験レポート ―覆い式野焼きにおける黒斑と壁体破片生成の過程―」『古代文化研究 第9号』
- (28) 島根県教育委員会 2003『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』
- (29) (28) と同。
- (30) (28) と同。

参考文献

- 浅川滋男 島根県古代文化センター編 同成社 2010『出雲大社の建築考古学』
- 米田克彦 島根考古学会 2010「玉作工房の構造と変遷 ―中国地方を中心に―」『島根考古学会誌 第27集』
- 山陰考古学研究会 2003『山陰の集落遺跡 ―弥生時代後期から古墳時代前期の集落像―』
- 島根県古代文化センター 2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ ―中国地方の玉作関連遺跡集成―』
- 島根県教育委員会 2010『道休加遺跡』
- 島根県教育委員会 1997『福富1遺跡 屋形1号墳』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1998『袋尻遺跡群発掘調査報告書』

遺物觀察表

表2 土器観察表

観測番号	出土位置	土層	種類	器種	器 量 (cm)			調製・手法の特徴	胎土・顔色	色 調	残存	備 考
					口径	高さ	底径					
1	S104内 SP204	1.黒灰色土(黄褐色土層含)	新生土層	壺	13.9	—	3.1	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	口縁部外面:埋付着 IV-204-V-1様式
4	S104内 SP204	黄褐色土	新生土層	壺	13.9	—	2.1	(外)鉄ナゲ, 磨削文4条 (内)鉄ナゲ	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	IV-204-V-1様式
5	S147	黄褐色土	新生土層	壺	20.0	—	7.0	(外)鉄ナゲ(口:磨削文4条, 胎土少量) (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	IV-204-V-1様式
6	S104内 SP117	黄褐色土	新生土層	器小壇の 底面	—	4.8	1.2	(外)ナゲ (内)不明	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	新生土層中間3-4層
7	S104内 SP206	黒褐色土(黄褐色土ゾーン含)	土層部	壺	磨削径 15.1	—	2.5	(外)鉄ナゲ, ハケ目 (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	1~2mm程度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田町
8	S104内 SP206	灰褐色土	新生土層	複合口縁壺	18.5	—	3.6	(外)鉄ナゲ, 磨削文4条 (内)鉄ナゲ(胎土少量)	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	V-303様式(東田3-4層)
9	SP10	褐色土	新生土層	壺	15.6	—	2.2	(外)鉄ナゲ, 磨削文4条 (内)鉄ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
10	SP17	黄褐色土	新生土層	器小壇の 底面	—	4.0	1.6	(外)ナゲ, 磨削文4条 (内)ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
12	S102	床面	土層部	壺	14.6	—	15.2	(外)鉄ナゲ(磨:工具痕) (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/3	
13	S102	床面	土層部	複合口縁壺	17.1	—	6.9	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/3	扉田町の複製をもつ
14	S102	床面	土層部	高坪	21.7	13.3	14.8	(外)鉄ナゲ, ヘラミガキ (内)鉄ナゲ, ヘラミガキ	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	2/3	
15	S102	床面	土層部	高坪	—	—	5.1	(外)不明 (内)ナゲ(磨:工具痕)	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/4以下	扉田4方向内側通かし
16	S102	床面	土層部	小型壺	8.2	—	9.0	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ 磨:磨削文, ヘラ刮り	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/3	
17	S102	床面	土層部	小型壺	磨削径 6.0	—	6.8	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ 磨:磨削文, ヘラ刮り	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/2	
18	S102	床面	土層部	不明	高さ 8.1	幅 6.1		(外)ナゲ, 磨削文 (内)ナゲ, 磨削文	1~2mm程度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/3	手づくね
19	S102内 SE285	1.黄褐色土	土層部	煎餅型付	21.7	18.5	11.1	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラミガキ)	100%程度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色 黄褐色	ほぼ完全	外面一帯:黒色に黄色帯S16-6
20	S102内 SE285	1.黄褐色土	土層部	高坪	15.9	12.9	11.2	(外)鉄ナゲ, ヘラミガキ, ハケ目 (内)鉄ナゲ, ヘラミガキ, ハケ目	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	ほぼ完全	磨削3方向内側通かし 胎土の可能性がある
21	S102内 SE285	1.黄褐色土	土層部	高坪	22.0	—	6.5	(外)鉄ナゲ, ヘラミガキ (内)鉄ナゲ, ヘラミガキ, ハケ目	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/3	胎土の可能性がある
22	S102内 SE285	1.黄褐色土	土層部	高坪	—	—	8.8	(外)ヘラミガキ, ハケ目 (内)ナゲ	砂粒ほぼばらばら ない	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	胎土の可能性がある
23	S102内 SE270	黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 14.9	—	3.6	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
24	S102内 SE270	黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 11.4	—	2.2	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	口縁部外面:埋付着
25	S102	1.黄褐色土	新生土層	高坪	—	15.2	2.0	(外)鉄ナゲ, 磨削文4条, 磨削文3条/磨:磨削文4条 (内)鉄ナゲ	100%以下の白色砂粒を含む	(外)灰褐色 (内)灰褐色	1/8以下	IV-204様式
26	S102	1.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 14.5	—	3.5	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田6-7層
27	S102	1.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 12.4	—	4.0	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田6-7層
28	S102	1.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 13.9	—	3.2	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田6-7層
29	S102	1.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 13.6	—	3.6	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%以下の白色砂粒を多く含む	(外)灰褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田6-7層
30	S102	1.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 17.6	—	4.6	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田6-7層
31	S102	1.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 19.2	—	4.4	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
32	S102	1.黄褐色土	土層部	高坪	—	—	6.8	(外)鉄ナゲ (内)ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
35	S102	2.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 17.8	—	4.5	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%以下の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
36	S102	2.黄褐色土	土層部	低脚坪	—	—	3.1	(外)不明 (内)鉄ナゲ	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
37	S102	3.黄褐色土	土層部	複合口縁壺	口縁下磨削 17.8	—	5.4	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	扉田6-7層
38	S102	3.黄褐色土	土層部	高坪一帯の 底面	—	20.0	4.6	(外)鉄ナゲ, ヘラミガキ (内)鉄ナゲ, ヘラミガキ	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
39	S102	3.黄褐色土	土層部	高坪	—	—	3.8	(外)鉄ナゲ, ヘラミガキ (内)ナゲ	1~2mm程度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
40	S102	3.黄褐色土	土層部	高坪	—	—	4.2	(外)鉄ナゲ, ヘラミガキ (内)ナゲ	100%以下の白色砂粒を少々含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	
41	S102	3.黄褐色土	土層部	器小壇の 底面	—	4.5	2.4	(外)ナゲ (内)ナゲ	1~2mm程度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	底面:胎土の埋付着
43	SE280	黄褐色土	土層部	単純口縁壺	13.2	—	6.4	(外)鉄ナゲ (内)鉄ナゲ(磨:ヘラ刮り)	100%度の白色砂粒を含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	1/8以下	外面:黒色物付着 扉田7層

検体番号	出土位置	土層	種類	部類	数量 (個)			調査・分析の特徴	胎土・焼成	色調	残存	備考
					口径	底径	器高					
44	3B20	褐色色土	土師器	高杯	22.0	—	5.8	(外) 鉄ナゲ、ヘラミダキ (内) 鉄ナゲ、ヘラミダキ	1mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	外面：漆付者
45	5103	赤黒	土師器	複合口縁部	口縁下段部 17.6	—	1.8	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ/黒(ヘラ削り)	砂粒はほぼ見当たらない	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	裏面：4割
46	5103	4. 黄褐色土	弥生土師	複合口縁部	12.3	—	3.2	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ	1~2mm程度の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	裏面：1~4割
47	5103	4. 黄褐色土	弥生土師	器壁の底部	—	9.0	5.2	(外) ナゲ (内) ナゲ	1mm程度の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	外面：一割・漆付者
48	5103	上層	土師器	壺	19.6	—	2.1	(外) 鉄ナゲ、黄次文4条 (内) 鉄ナゲ、黄次文4条	1mm程度の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/4以下	
49	5103	6. 灰褐色土・黄褐色土混合土	土師器	小型壺	口縁下段部 8.0	—	2.5	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ/黒(ヘラ削り)	1mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	
50	5103	6. 灰褐色土・黄褐色土混合土	土師器	複合口縁部	13.9	—	3.5	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ	1mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	外面：漆付者 裏面：1割
51	3B6内 SP174	1. 灰褐色土	土師器	単純口縁部	21.0	—	3.2	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ	1mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 緑褐色 内：黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	裏面：7割
52	3B6内 SP18	黄褐色土・黄褐色土混合土	土師器	低脚杯			1.80	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ	1mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	裏面：7割
54	3B6内 SP17	灰褐色土(灰台)	土師器	複合口縁部	20.8	—	4.9	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ	2~3mm程度の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	裏面：7割
55	SP105	灰褐色土・黄褐色土混合土	弥生土師	壺	16.0	—	7.0	(外) 鉄ナゲ 口：3条文2条/黒(ヘラ削り) (内) 鉄ナゲ/黒(ヘラ削り)	1~2mm程度の砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	IV-20V-1様式
56	SP105	灰褐色土・黄褐色土混合土	弥生土師	器壁の底部	—	—	8.6	(外) 鉄ナゲ、ヘラミダキ (内) ヘラ削り、厚面圧痕	1~3mmの砂粒を含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	外面：漆付者 外面一部：黄褐色土に藍色弥生時代中層~後層
57	SP105	灰褐色土・黄褐色土混合土	土師器	複合口縁部	口縁下段部 18.8	—	3.9	(外) 鉄ナゲ (内) 鉄ナゲ	1mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1/6以下	裏面：7割

表3 石製品観察表

検体番号	出土位置	土層	種類	数量 (個)			重量 (g)	石材	残存	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
2	5101 埋蔵層付近	灰褐色土	石鏝 (凹基石)	2.8	1.9	0.4	1.32	燧石片	先端部欠損	
3	5101 埋蔵層付近	灰褐色土	砥石	9.3	3.6	2.6	107.04	燧石片	欠損	全断面(4面)を砥石として使用
11	遺構外	遺構面上	石製土製品	1.6	2.5	0.6	2.12	燧石片	割片	埋蔵加工あり
33	5102	1. 黄褐色土	叩き石か	5.1	5.0	2.4	82.02	燧石	割片	加工・使用痕跡なし
34	5102	1. 黄褐色土	砥石	3.2	2.9	0.6	7.16	燧石	割片	1面に使用痕あり
42	5102	埋土層	燧石?	1.4	1.2	1.0	2.42	燧石	割片	
53	3B7内 SP12	黄褐色土・黄褐色土混合土	砥石	3.1	3.5	0.5	5.86	燧石片	割片	1面に使用痕あり

表4 焼粘土塊観察表

検体番号	出土位置	土層	種類	数量 (個)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
58	SP12	1. 灰褐色土	焼粘土塊	4.5	4.3	3.5	69.77	貫通はしない穴あり、鉄片等のようなものを挟んだ痕か
59	SP12	1. 灰褐色土	焼粘土塊	7.0	4.6	7.0	132.77	凹凹痕。貫通はしない穴あり、鉄片等のようなものを挟んだ痕か
60	SP12	1. 灰褐色土	焼粘土塊	9.9	7.6	4.8	249.31	茶のような付着物が残っている
61	SP12	1. 灰褐色土	焼粘土塊	5.5	10.2	6.9	223.97	1面に人為的に作られた凹痕あり
62	SP108	黄褐色土	焼粘土塊	7.6	7.4	6.1	254.21	胎土塊の中に土師器片が混入(挟まっ)ている。
63	SP108	黄褐色土	焼粘土塊	7.2	6.9	5.1	184.70	1面に人為的に作られた凹痕あり

写真図版

調査前全景
(東から)



調査区内堆積土
(北から)



調査区内堆積土
(北東から)





S101
プラン検出
(北西から)



S101内
中央ビットSK294
土層断面
(南から)



S101
完掘
(北から)

S801
完掘
(東から)



SK47
完掘
(南から)



S802
完掘
(南西から)





SB02内
SP264・SD117
(南西から)



SB02内
SP264土層断面
(南西から)



SB03
完掘
(東から)

S804
完掘
(北から)



S804内
SP35土層断面
(東から)



作業風景
(東から)





S102
プラン検出
(北から)

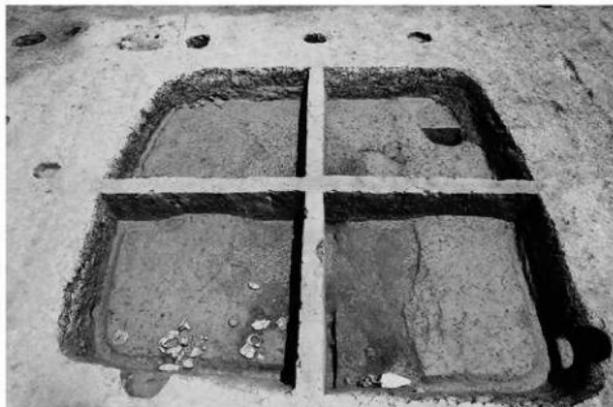


S102
東西 土層断面
(南から)

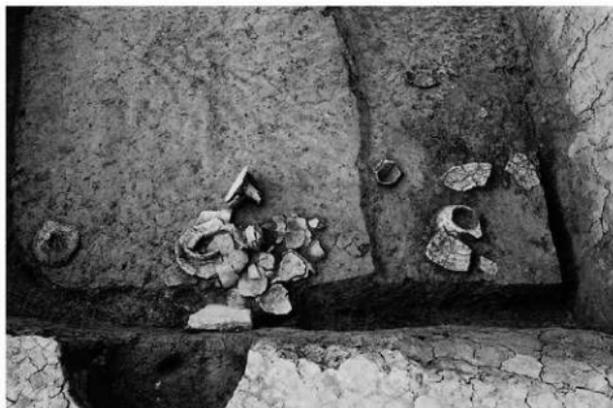


S102
南北 土層断面
(東から)

S102
床面遺物出土状況
(南から)



S102
床面 南側
遺物出土状況
(南から)



S102
床面 南北側
遺物出土状況
(北西から)





S102内
SK288・SK287
土層断面
(東から)



S102内
SK270土層断面
(南から)



S102内
SP276土層断面
(東から)

S102内
SK285
遺物出土状況
(北東から)



S102内
SK285土層断面
(西から)



S102内
SK285完掘
(南から)





S102内
SD293
(北から)



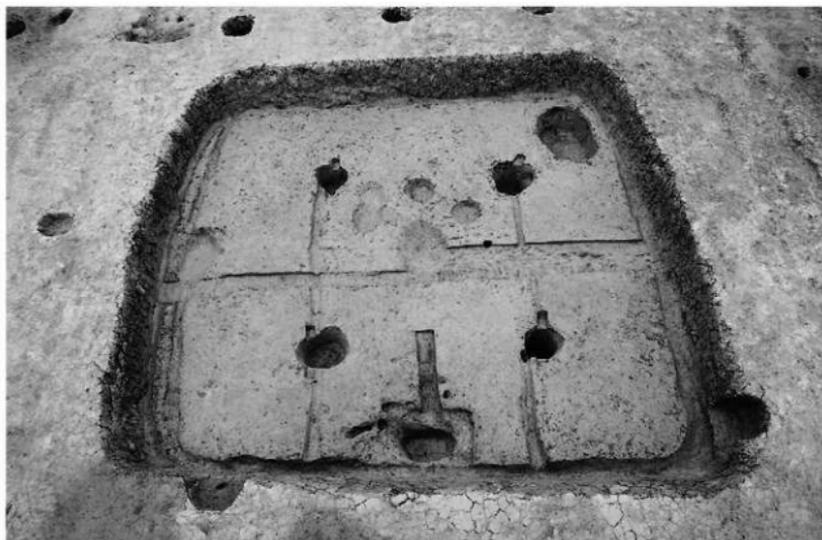
S102内
貼り床断面
(南から)



S102内
壁際溝 2
完掘
(南から)



S102 貼り床面 完掘 (南から)



S102 貼り床除去後 完掘 (南から)



SK250
完掘
(東から)



S103
土層断面
(北西から)



S103
完掘
(北西から)

S805
完掘
(北東から)



S806
完掘
(北から)



S807
完掘
(東から)





SB07内
SP02 土層断面
(東から)



SA01
完掘
(南東から)



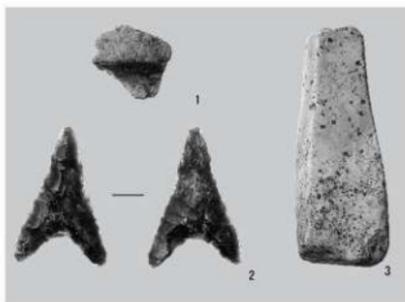
SD139・SP105
完掘
(北東から)



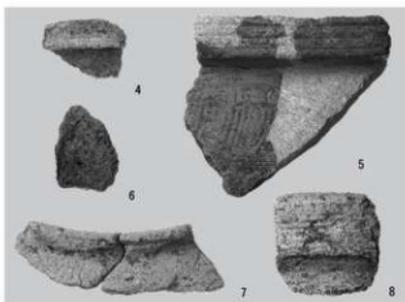
調査区 南側 調査後 全景（北東から）



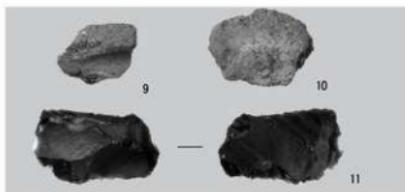
調査区 北側 調査後 全景（東から）



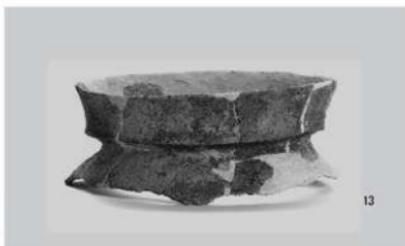
S101 出土遺物



SB01(4)・SK47(5)・SB02(6)・SP256(7)・SB04(8) 出土遺物



SP60(9)・SP97(10)・遺構外(11) 出土遺物



13



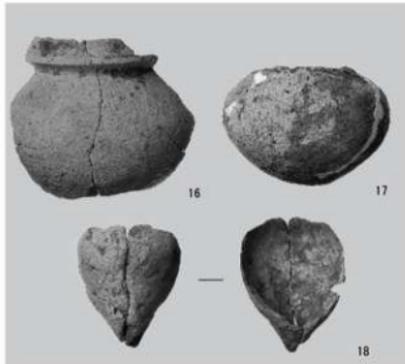
12



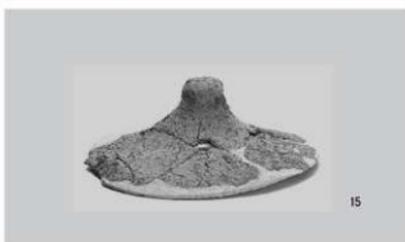
14



14

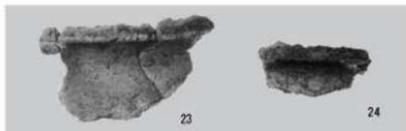


18



15

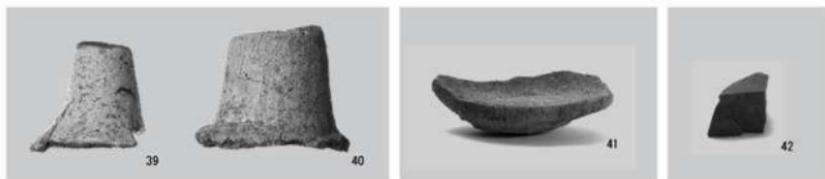
S102 貼り床面 (12~18) 出土遺物



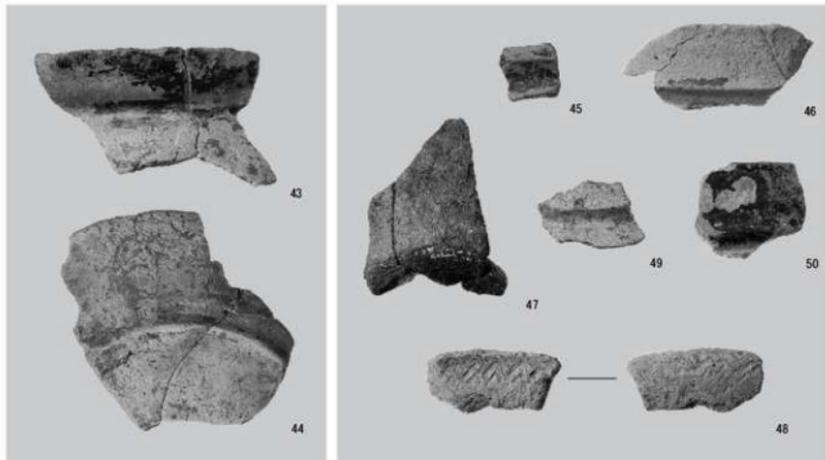
S102内 SK285(19~22)・SK270(23・24) 出土遺物



S102 埋土層 出土遺物

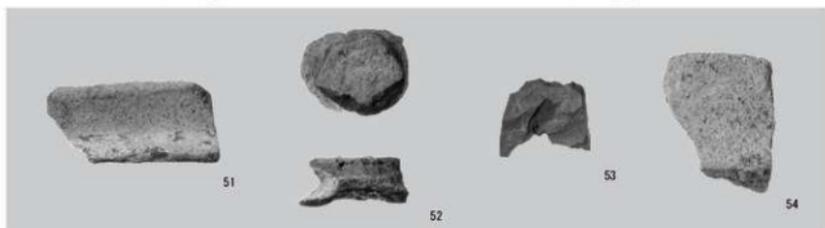


S102 埋土層 出土遺物



SK250 出土遺物

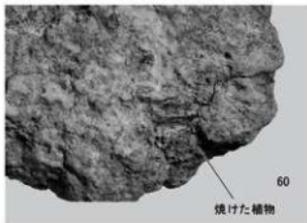
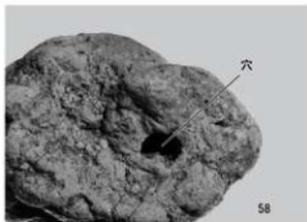
S103 出土遺物



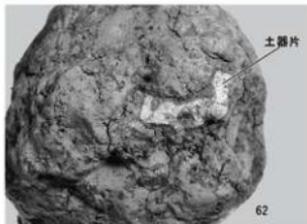
SB05(51)・SP88(52)・SB07(53)・SA01(54) 出土遺物



SP105 出土遺物



S172 出土 焼粘土塊



SP108 出土 焼粘土塊



後麗遺跡出土 焼粘土塊 (SP72・SP105・SP108・SP247出土)

報告書抄録

ふりがな	うしろざこいせき						
書名	後廻遺跡						
副書名	(仮称) 上乃木高齢者専用賃貸住宅新築工事予定地内発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第145集						
編著者名	落合昭久						
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地	〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F TEL: 0852-55-5284 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月	2011年10月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
うしろざこいせき 後廻遺跡	しまねけん 島根県 まつまし 松江市 あのきのぎ 上乃木 三丁目 609番1、 ほか、ひつ 外3筆	32201	D-1101	133°03'36"	20110418 ～ 20110621	650 m ²	高齢者専用 賃貸住宅新 築工事
				35°26'55"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
うしろざこいせき 後廻遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡	弥生土器 土師器 石鏝 砥石 焼粘土塊	弥生時代と古墳時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡を検出した。このうち、弥生時代後期の掘立柱建物跡には3棟の布掘り構造をもつものがある。		

松江市文化財調査報告書第145集
(仮称)上乃木高齢者専用賃貸住宅
新築工事予定地内発掘調査報告書

後 廻 遺 跡

平成23年10月

発 行 松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印 刷 有限会社 松 陽 印 刷 所
島根県松江市学園南2-3-11